80-159
1200501321844
80
59

部

文學士桑原隲藏編著

初等東洋史

東京　大日本圖書株式會社

初等東洋史弁言六則

(第一)予昨春中等東洋史を著はして、中學の教科に充てんと志しゝが、卷帙やゝ浩瀚に失せしかば、今新に前書を省略訂正して本書を上梓し、以て中學の教科に應せんとするなり。

(第二)本書は中等東洋史を省略せしものなるが故に、中學教師にして、本書の源流を委曲にせんと欲する者は、必ず中等東洋史を參考するを要す。

(第三)本書と中等東洋史との間、事實に就き若くば年代に就きて、時に出入異同なきにあらず。姑く本書を以て定說となすべし。

(第四)本書を學ぶ者は、必ず拙著中等東洋沿革地圖に就きて、各時代に於ける事變と、其舞臺との連鎖を明瞭ならしむるを要す。

(第五)本書の固有名詞は、必しも原音に從はず。漢史に散見せる外國の地名、人名、及其他の固有名詞にありては、力めて其漢字の發音と相近接するものを採り、原音の何國語たるを問はず。例せば卑路斯を『フェロッエ』といはずして『フィルズ』と訓し、黠戛斯を『キルギス』といはずして『ガズガズ』と訓し、嚈噠を『セダル』といはずして『エフタル』と訓するが如き是なり。漢史に傳はらざる外國の固有名詞は、主として英音に據る。これ中學生徒の最も慣用する所なればなり。

(第六)本書編纂の大方針は、曩に中等東洋史の開卷に掲けたる弁言十則中に備はれば、今又斯に贅せず。

明治卅二年二月

著者識

初等東洋史

文學士　桑原隲藏著

第一編　上古期　漢人種膨脹時代(四百四十年以前)

第一章　太古

漢人種の起源

今日支那本部に蔓延せる漢人種は、少なくも今より五千餘年前の古代に、西北の方面より、次第に支那内地に移住し來りし者なり。彼等は其初め、黄河附近の地に幾多の部落をなし、各其部長を戴きしが、年月を經るに從ひ、其部民多くして、最も威勢ある部長は、次第に近傍の諸部長を服

黄帝一統政治の基を開く

帝堯帝舜の時代

従せしめて、共同の大部長となる。之を元后といひ、後世の皇帝の姿をなし、服従せられたる諸部長は之を群后といひ、後世の諸侯の姿をなすに至れり。

此元后の中にて、最も有名なるは黄帝なり。彼は今より四千二三百年前の古代に出でし英主にして、頻に四方を征服し、遂に東は海より、西は今の甘肅の西部に至り、南は楊子江より、北は今の直隷、山西の北部に達する一大帝國を建て、此の如くして、支那に於ける一統政治の基礎を定めたり。

黄帝の後二百餘年にして、帝堯帝舜の二英主相繼ぎて出で、鯀(コン)・驩兜(クワンタウ)以下、當時の大群后にして、帝命を奉ぜざる者を

夏の禹王世襲君主の基を定む

誅戮して、元后の威嚴をたて、又中央政府には、百揆(政務を總理す)司徒(教育を掌る)士(刑罰を掌る)共工(工業を掌る)等の諸官をおきて、政務を分擔せしめしかば、一統政治の根抵漸く鞏固となれり。』

帝舜に繼ぎて、夏后禹帝位に即く。帝堯帝舜の際、九年間の大洪水ありしを、禹よく之を治めしより、天下の歸服を得、後遂に群后に推れて元后となり、安邑(山西省解州夏縣)に都し、國を夏と號せり。これ實に我紀元前千四百年の頃なり。

黄帝以前より、幾多の群后諸方に割據して、自から封建の姿をなしゝが、禹王の時に至り、天下の群后尚ほ三千に餘りて、勢力頗る強く、殆ど元后廢立の權を握りしが、彼等も深く禹王の治水の大功に心服し、從うて長く元后の位を

禹王の子孫に傳ふることゝなり、支那に於ける世襲君主の基は斯に定まれり。

禹王の後、其子孫相嗣ぎて天下に君臨せしが、十三世の孫なる王履癸は、世に所謂桀王にして、暴虐なりしかば、我紀元前九百年の頃、商后湯は諸侯より起りて之を滅ぼし、代りて帝位に即き、亳（河南省歸德府商邱縣）に都し、國を商と號せり。湯王の後十數傳して、王盤庚の時、水災を避けて都を殷（河南省河南府偃師縣）に遷しゝかば、是より商又殷と稱せり。王盤庚の後更に十一傳して、王受辛に至る。所謂紂王にして、暴虐なりければ、周后發は諸侯を率ゐて之を滅ぼし、代りて帝位に即く。時に我紀元前三百九十一年なり。

夏亡び殷興る

殷亡び周興る

第二章　周の盛衰

周后發は昌の子なり。昌は世に所謂文王にして、聖德ありしが、發其後を承けて、益諸侯の歸服を得、遂に紂王を滅ぼして、都を鎬（陝西省西安府）に奠め、國を周と號せり。所謂武王是なり。武王幾ならずして死し、子成王尚ほ幼なりしかば、其弟周公旦、召公奭共に政を攝し、天下を兩分し、召公は其西半を主どり周公は其東半を統べたり。周公は又周一代の制度を定めしが、こは支那歷代の制度の本源となれるものなれば、左に之を畧述すべし。

周公制度を定む

(第一)封建　周公は天下の諸侯を分ちて、公、侯、伯、子、男の五

封建の制

等となす。公、侯の封地は方百里（凡そ我十一里半四方）ありて、之を大國といひ、伯の封地は方七十里（凡そ八里四方）にして、之を中國といひ、子、男は共に其封地方五十里（凡そ五里半四方餘）にして、之を小國と稱せり。當時天下は九州に分れしが、其中央の一州方千里の地は、王の直領に屬し、其餘の八州は皆諸侯の領地に歸し、其數凡そ千八百に近かりしといふ。而して八州には、各伯をおきて州内の諸侯を制馭せしめしかば、天下をすべて八伯あり。八伯は其配下の諸侯を率ゐて、周公、召公に分隷し、此の如くして中央政府と、地方の諸侯との連絡を保てり。

（第二）官制　周公は中央政府に、天、地、春、夏、秋、冬の六官を設

周の官制

けて、國治を分擔せしめたり。六官の職掌は大畧左の如し。

官	長	職掌	官	長	職掌
天官	大家宰	天下の政治を總理す	夏官	大司馬	兵馬を掌る
地官	大司徒	教化を掌る	秋官	大司寇	刑罰を掌る
春官	大宗伯	祭祀及禮樂のことを掌る	冬官	大司空	百工のことを掌る

周の田制

（第三）田制　支那の古代に在りて、田租は政府の主要なる歳入となりたれば、周公も亦尤も其意を田制に用ゐたり。即ち其王都に近く、人家稠密にして土地狹隘なる所には、家毎に田百畝（凡そ我二町三段弱）を授け、其十畝の所得を朝廷に納めしむ。之を貢法といふ。又王都に遠く、人家稀少にして、土地廣漠なる所には、井田の法を用ゐ、九百畝を一井となし

宣王と幽王と

て之を九分し、其八部を八家に分授して、其所得を私有せしめ、中央の一部百畝を公田となし、八家にて之を耕作し、其所得を朝廷に納めて租稅に充つ。之を助法といへり。

成王及其子康王の時は、天下頗る太平なりしが、其後王室次第に衰微し、諸侯漸く專横にして、或は王號を僭し、加之四方の夷、狄も亦、漸く内地に逼れり。成王の後、凡そ四百年にして宣王出で、内は賢相に任じて國政を正し、外は名將を擧げて夷、狄を攘ひ、一時王室を恢復せしが、其子幽王無道なりしかば、諸侯離畔し。西戎之に乘じて遂に王都鎬を陷れ、幽王を殺せり。（皇紀前百十一年）

幽王の子平王は、諸侯の救によりて、位に洛邑（河南省河南府）に即

周の東遷

けり。初め武王の時、都を鎬に奠めしが、山、河重疊して交通便ならざれば、成王の時更に洛邑を營み、之を東都となして諸侯の會合の所となし、鎬を西都として王の居所に充てしが、今や西都は西戎に陷りし故に、爾來周王は皆東都に住することゝなれり。之を周の東遷といひ、實に我紀元前百十年に當れり。然れども東遷以後、周の王室は愈衰へ、殆ど無政府の有樣を呈するもの五百年、史家之を春秋、戰國の世とす。春秋の世とは、東遷後凡そ三百年間を指す。此時代の事跡は、孔子の作りし春秋の中に錄せらるゝを以てなり。此間に小諸侯は畧併吞せられて、遂に七大諸侯となり、互に攻爭を事とせしより、春秋の後二百餘年間を指

春秋及戰國時代

して、戰國の世と云ふなり。

第三章　覇者の興亡

支那古代の諸侯は、其數頗る多く、周の初世には、千八百に及びしが、其後次第に相併呑せしも、春秋の初世に至りて、尚ほ百六十に餘れり。彼等は王室の衰へたるを機として攻爭を事とし、四方の夷、狄は、又之に乘じて愈内地を侵畧し來り、漢人種の運命實に危殆を極めたり。是に於て諸侯の有力なる者は、王命を藉りて諸侯の盟主となり、内は彼等の攻爭を抑へ、外は彼等の力を協せて、夷、狄の侵畧を防がんと志すに至れり。之を覇者といふ。初めて覇者となりしは齊の桓公なり。

覇者の起りし次第

桓公と管仲と

（第一）齊の覇業　齊は今の山東の大部を占め、其都は薄姑（山東省青州府博興縣）なり。皇紀前廿五年の頃、桓公其國に主となり、管仲に任じて頗る富强を致し、遂に王命を以て諸侯の覇者となり、（皇紀前十九年）其兵を合せて北狄を攘ひ、又南に向うて楚を屈せり。是より先き、楚は中國の諸侯の相攻爭せるを機として、次第に領土を北に擴めしが、桓公始めて之を屈服せしめ、一時其北畧を防止するを得たり。然れども幾ならずして管仲、桓公相尋ぎて死せしかば、齊の覇業衰へ、楚は其勢を恢復して、殆ど中國を併呑せんとせしが、幸に晉の文公は、復諸侯の覇者となりて之を挫けり。

齊衰へ晉興る

文公の覇業

(第二)晉の覇業　晉は大抵今の山西の地を占めて絳(山西省平陽府翼城縣)に都せしが、文公其國に主となるや(二十六年)會王室は北狄の苦しむる所となりしかば、文公其難を救ひ、又中國の諸侯を率ゐ、楚を城濮(山東省曹州府濮州)に破りて其北侵を妨げ、遂に王命を以て覇者となる。(二十九年)然るに其孫靈公の時に至りて內亂起り、晉の國威の衰へたるに乘じ、楚は遂に中國の諸侯を壓服して覇者となれり。

晉衰へ楚興る

(第三)楚の覇業　楚の根據地は、今の湖北にして、郢(湖北省荊州府)に都せり。周の東遷の後、武王、文王等の賢主其國に君臨し、次第に近傍の小諸侯を併せて、勢頗る强大となり、莊王其國主となるに及び、(四十八年)晉の內亂を機として之を邲(河南省開封府鄭州)に破り、代りて中國の覇者となりしが、其孫平王の時、內亂ありしかば、吳は之を襲ひ破り、其勢によりて中國の覇者となれり。

吳越の盛衰

(第四)吳及越の覇業　吳は姑蘇(江蘇省蘇州府)に都して、今の江蘇の地を占む。闔閭(カフ)其國主となるに及び、(百四十七年)楚の國都を陷れて江淮(揚子江と淮水とのあいだをいふ)の地を併呑し、其子夫差の時、南越を降し、遂に中國に入りて覇者となりしが、越王勾踐其虛を襲うて吳を滅ぼし、(百八十八年)代りて覇者となれり。越は今の浙江の地を占め會稽(浙江省紹興府)に都せり。吳と境を接せしを以て常に相攻爭せしが、勾踐遂に吳を破り、一時强大を極めしも。勾踐の後、國勢漸く振はず。楚は之に乘じ

て、次第に勢を恢復し、遂に越を征服して(二百二十七年)復南方に雄視するに至れり。

王室の威嚴次第に地に墜つ

第四章　春秋の末世及戰國の初世

周は東遷の後、天子の實權なかりしも、尚ほ幾分の威嚴を存して、天下の尊敬を受くるに足りしかば、諸侯も亦必ず王命を請うて覇者となりしが、其後覇者輩出して、天下の大權悉く大諸侯に歸せしより、彼等は其勢を負ひ、各王室を倒して、天下を統一せんこと望みければ、春秋の末世より、戰國の初世にかけて、復一人の尊王を說く者なく、全く大諸侯競爭の舞臺となれり。

陪臣次第に權勢を得

田齊と三晉と

戰國の七雄

且つ又覇者興りてより、諸侯は常に外に出でゝ會盟に忙はしく、從うて國事は多く之を其重臣に委ねしより、彼等は頻に私惠を施して、國民の歸服を得、次第に權力を增進して、遂に其主家を簒ふに至れり。晉の重臣に韓、魏、趙の三氏ありて、晉地を分領せしが、遂に王命を以て諸侯となり、(二百五十八年)齊の重臣田氏も亦齊を簒ひ、命ぜられて諸侯となる。(二百七十五年)之を田齊といふ。春秋の初世に於ける列國、今や殆ど滅亡し盡き、其よく大諸侯の面目を保てる者、北に燕、南に楚、西に秦あるのみ。此三舊國に、田齊、韓、魏、趙の四新國を加へて戰國七雄と稱す。其割據の形勢大畧左表の如し。

春秋戰國の際諸學說興起せし所以

國名	都城	國名	都城
秦	咸陽（陝西省西安府咸陽縣）	韓	陽翟（河南省禹州）
楚	郢（湖北省荊州府）	魏	安邑（山西省解州夏縣）
燕	薊（直隸省順天府大興縣）	趙	邯鄲（直隸省廣平府邯鄲縣）
田齊	臨淄（山東省青州府臨淄縣）		

春秋以來、王室は上に衰へ、諸侯は下に爭ひ、天下塗炭に苦みければ、志ある者此間に出でゝ、時弊を匡正せんと試むるに至るは、自然の勢なり。殊に當時王法弛みて、思想の束縛とけ、言論の自由となりしと、禮義壞れて上下の區別亂れ、立身の容易となりしとは、益此氣風を助長せしめしかば、春秋の末世より、戰國時代にかけて、治國、安民の術を講

take care!

孔子及儒教

孟子、子思及荀子

ずる者頗る多く、就中最も有名なるは、孔子と老子となり。』

孔子は名を丘、字を仲尼といふ。皇紀百十年を以て魯國（山東省兗州府附近）に生れ、初めて儒教を唱ふ。要は孝悌を本とし、忠恕を方となして、仁道を天下に行ふに在り。故に其教は脩身齊家に始まり、治國、平天下に終はる。然れども當時の用ゆる所とならざりしかば、退きて易に傳し、書を序で、詩を整へ、春秋を作り、禮、樂を正し、其道を後世に傳ふ。年七十三にして死す。孔子の道は永く支那政教の基礎となり、後世其教を奉ずる者を儒家といふ。孔子の後、儒家の名ある者を子思、孟軻、荀況となす。子思は孔子の孫にして中庸を作り、孟軻は孔子の後、百四五十年に出で、孟子を著して性善を

唱へ、荀況は戰國の末に出で、荀子を作りて性惡を唱へたり。

老子及道家

孔子と殆ど同時に、楚に老子出づ。姓は李、名は聃といふ。道德經を著はし、專ら自然を尙び、無爲を唱へて禮儀、制作を排せり。老子の後百年にして、列禦寇は列子を著はし、其後莊周更に莊子を著はし、共に老子の道を顯揚せり。其道を奉する者を道家といひ、道家は一變して道教となる。道教は儒教、佛教と相對して、今日尙ほ支那に流行せり。

莊子と列子と

墨翟及楊朱

孔子、老子出でゝより、北方の學者は多く孔子を祖述し、南方の學者は多く老子を祖述せしも、尙ほ其間に在て異說を立つる者少からず。墨翟は兼愛の說を唱へて、墨家の祖となり。楊朱は之に反して自愛の說を主張せしが。商鞅、韓非の輩、法と術とを說くに及んで、又法家の名あり。此の如く、諸學派崛起して、互に論難、辯駁を事とせり。

法家

秦の孝公と商鞅と

第五章　秦の興隆

秦はもと渭水の上流に國せし一小諸侯なりしが、周の東遷の後、秦は頻に西都附近の西戎を征服して、今の陝西の地を併せ、國勢强大となり、孝公其國に主となるに及んで（三百年）英明にして大志あり。重賞を懸けて天下の名士を招き、遂に商鞅を用ゐて國政を一變せり。其改革の要點は主として國の財源と、兵力とを增進するに在り。

秦の大改革

(第一)財源を豐にせんが爲に、民に二男以上ありて分家せざる者は、其賦を倍して歳入を增し、又農耕、紡織に勤むる者は其力役を免じ、之を怠る者は官に沒して奴婢に充て、以て國内の農、工業を奬勵せり。

(第二)兵力を强くせんが爲に、一切の爵位は、軍功によりて之を授け、王族と雖ども、軍功なき者は其籍を除けり。

此の如く外は天下の賢材を招致し、内は財力、兵勢を增進せしかば、幾年ならずして、秦の國勢頗る强大を加へ、殆ど天下を併呑するの勢あり。是に於て、從來攻爭を事とせし自餘の六國は俄に攻守同盟を結ぶに至れり。之を合從といふ。從は縱と同じく、南北の義なり。當時六國の位置南北に列せしが故に、六國同盟するを合從といふ。始めて合從の說を唱へて、六國を同盟せしめしは蘇秦なり。(三百二十八年)然れども幾ならずして同盟壞れしかば、秦は之を機とし、張儀をして諸侯に說くに、合從の不利にして、連衡の利なるを以てせしむ。(三百五十年)衡は橫と同じく東西を指す。當時秦は西に在りて、六國其東に位しければ、六國の秦に服從するを連衡と云ふなり。

蘇秦の合從と張儀の連衡と

蘇秦、張儀が合從、連衡の說を唱へしより、天下の士其風を襲うて、四方に游說する者頗る多く、六國の君主も亦、或時は合從して秦に抗し、或時は連衡の說を納れて秦に服し、形勢反覆一ならざりしが、六國の團結終始鞏固ならざり

六國及周の滅亡と秦の一統と

しと、其君主概ね暗愚なりしとにより、遂に前後して秦の討滅する所となれり。

孝公五世の孫、嬴政秦に王たるに及んで、(四百十五年)六國の相和せざるに乘じ、遠交、近攻の策をとりて之を孤立せしめ、又其國君の暗愚なるを利し、反間を放ちて君臣を疑はしめ、然る後に猛將をして之を攻めしめしかば、韓先づ亡び、(四百三十一年)趙、魏、楚、燕、齊の諸國も亦之につげり。周の王室は、平王より廿四傳して赧王に至りしが、さきに已に秦に降りしを以て(四百五年)六國の滅亡と共に、天下全く秦の統一する所となれり。(四百四十年)

秦の始皇帝

封建を廢し郡縣を興す

第二篇 中古期 漢人種優勢時代(皇紀四百四十一年乃至千五百六十七年)

第一章 秦の盛衰

秦王嬴政已に天下を一統してより、自から始皇帝と號し、周代諸侯跋扈して、王室衰微せしに鑑み、專ら帝權を擴張して、世襲の基礎を鞏固にせんが爲に、左の方法を採れり。

(第一)政治の劃一を圖らんが爲に、六國滅亡の後は、一族・功臣に唯歳入の幾分を給して土地を與へず。天下を擧げて皇帝の直隷地となし、之を卅六郡に分ち、各郡に守・尉・監をおく。守は民治を、尉は兵事を掌どり、監は之を監視す。中央政府には、丞相・太尉・御史大夫ありて天下を統轄す。丞相は

秦の新官制

天下の大政を統べ、太尉は天下の兵事を統べ、御史大夫は丞相と太尉とを監視すること、郡と異なるなし。而して中央政府より地方の官吏に至る迄、皆皇帝の任命にかゝり、朝廷の租稅に衣食する者なるが故に、君權頗る强大となれり。

富豪を國都に徙す

(第二)民間の兵器を收め、又天下の富豪を國都咸陽に聚めて、騷亂の源を塞げり。

土木を起す

(第三)天子の尊嚴を誇示せんが爲に、盛に土木を起し、阿房宮を渭水の南に作る。(四百四十九年)東西二百間、南北四十丈あり。又離宮七百を建て、皆華麗を極めたり。

書を燒き儒を抗にす

(第四)當時天下の學者は、戰國時代の餘風を受け、政治を可否して治安を妨げしかば、遂に挾書の禁を發し、民間の書を收めて之を燒き、(四百四十八年)尋で學者四百餘人を坑殺して、其流弊を絕てり。(四百四十九年)

長城を增築す

此の如く始皇帝は國內に帝權を張ると共に、其六國を統一せし威勢を駈りて外征を企て、一は國威を發揚し、一は內亂を防壓せんと試みたり。戰國の末より、蒙古地方に匈奴崛起して、次第に支那內地に逼りしかば、秦、趙、燕等の北邊の諸國は、皆長城を築きて之に備へしが、始皇帝遂に蒙恬(デン)をして之を擊破し、河南(今の鄂(オ)爾(ド)多(ス)斯)の地を取らしめ舊來の長城を增築して、所謂万里の長城となし、匈奴の入寇を禦ぎ、(四百四十七年)又南に向うて南越(今の廣東、廣西より安南に至る)を畧取せり。

支那の國名の起原

是に於て秦の威名遠く外國に振ひ、外國人は秦を訛りて支那といひ、遂に今日の國號となれり。

然れども土木に外征に、人民は奔命に疲れて亂を懷ひ、殊に書を燒き儒を坑にしてより、天下の學者四方に散じて人民を煽動し、六國の遺族、舊臣等も亦、所在に恢復を志しけれは、始皇帝死し、宦者趙高其子二世皇帝を擁立して、政權を擅にするに及んで陳勝先づ兵を蘄（安徽省鳳陽府宿州）に起し

亂源二世皇帝に至りて破裂す

項羽と劉邦と

て王を稱し、（四百五十二年）之につぎて叛亂四方に起れり。時に楚の舊臣項羽は、其主懷王を奉じて兵を吳（江蘇省蘇州府）に起しゝが、劉邦も亦沛（江蘇省徐州府沛縣）より起りて之に應ぜしかば、兵勢大に張り、頻に諸郡を陷れ、劉邦は漢水に沿ひ、項羽

劉邦秦を降す

は黃河に沿うて西に進み、直に咸陽に逼れり。二世皇帝大に驚き、趙高を譴責せしかば、趙高は反つて之を弑し、其從子、子嬰（エイ）を立てしが、幾ならずして子嬰之を族誅せり。是時劉邦の兵已に咸陽に逼りければ、子嬰は遂に出で降れり。（四百五十四年）秦天下に帝たること僅に十五年に過ぎず。

第二章　西漢の初世

項羽西楚の霸王と號す

初め懷王諸將に約して、先づ秦を降しゝ者に、關中の地を與へんことを定めしが項羽は劉邦の功を嫉みて約を奉せず。强ひて劉邦を漢中、巴蜀の僻地に王たらしめ且つ懷王を江南に移して後之を弑し、自から西楚の霸王と號し、

劉邦項羽を斃して天下を一統す

彭城（江蘇省徐州府）に居りて、天下の政權を掌握せり。劉邦は一時漢中に退き、蕭何に國政を委ね、韓信に軍事を委ね、張良を謀臣として、日夜復讐の機を伺ひしが、會〻山東、河北の地亂れ、項羽の之が鎭壓に出陣せるを利し、急に襲うて彭城を陷れたり。（四百五十六年）項羽軍を還して之を逆へ、攻爭四年に及びしが、遂に力屈して烏江（安徽省和州）に自殺し、（五百五十九年）劉邦帝位に即く。之を高祖となす。もと漢中に王たりしを以て國號を漢と稱し、都を西長安（陝西省西安府）に奠めしが故に、史に之を西漢と稱せり。

高祖の項羽と戰ふや、重賞を懸けて豪傑の士を招きしが、天下一統の後は、漸く其强大を恐れ、且つ又深く秦の孤立して敗亡せしに懲りければ、機會ある毎に、諸功臣の封地を沒收して其子弟に與へ、以て皇帝の藩屏に備へたり。然れども此等同族の諸王の封地頗る大に過ぎ、其權勢も亦强きに過ぎたるが故に、內外輕重の勢を失ひ、反つて後年の禍亂を養成せり。

子弟を分封して藩屏に備ふ

高祖死し、（四百六十六年）子惠帝嗣ぎ、惠帝の後、高祖の皇后呂氏一時政權を握りしが、惠帝の弟文帝遂に位に即けり。（四百八十二年）帝性勤儉なりしかば、國用蓄積し、屢田租を除きて民力を休養し、天下頗る太平なりしも、其實諸王專橫の風は、此間に在りて其極に達し、文帝の死後幾ならずして反亂起れり。

吳楚七國の亂

封建の制廢して郡縣の治行はる

曩に高祖皇室の藩屏を鞏固にせんが爲に、過度の封地・權勢を、同族の諸王に附與せしより、諸王の跋扈漸く甚だしく、文帝の政寛仁なるに乘じて、殆ど朝命を奉ぜざるに至れり。是に於て文帝の子景帝立つや、鼂錯の勸に從ひ、やゝ諸王の封土を削奪して、朝廷の威勢を張らんとせしかば、吳王は楚、趙、膠西、膠東、菑川、濟南の六國王と兵を連ねて朝廷に反抗せしが、周亞夫の爲に平定せられたり。之を吳・楚七國の亂といふ。(五百七年)

七國の亂平ぎてより、景帝は諸侯王を京師に留め、復國に就かしめず。其封國には、朝廷より官吏を派して、其政を執らしめしが故に、諸王の國も其實天子の直隸地に異なるなく、封建の制斯に廢して、郡縣の治專ら行はれたり。

武帝儒學を興し文學を奬む

第三章　西漢の極盛

景帝に嗣ぎて武帝位に即きしが、(五百二十一年)文帝勤儉の結果として國庫充實し、景帝が諸王を抑損せし後を承けて、帝權强大なりしかば、元來雄畧、大志に富める武帝は、內は學術・文學を奬勵し、外は征伐、遠圖に從事せり。

惠帝の時已に挾書の禁を解きしも、(四百七十年)學術未だ盛ならざりしが、武帝の時始めて儒學を尊崇し、五經(易、詩、書、禮、春秋)博士をおけり。(五百二十五年)是より支那歷代の政敎、必ず儒學を表式となすに至れり。武帝又文學、詞賦を奬勵せしかば、司馬

武帝閩越及南越を併す

相如、司馬遷等の名家輩出せり。然れども武帝の大功業は外征に在り。帝は先づ西南の蠻族を征服し、尋で朝鮮を滅ぼし、又西域諸國に通じ、匈奴を擊破して、連に漢の領土を擴めり。

(第一)西南蠻との關係　楊子江以南の地は、夙に今の安南、暹羅一帶に蔓延せる交趾支那人種の占領に歸し、久しく漢人種の勢力以外に立てり。秦の時一旦南越を平定せしも、秦の滅亡と共に復化外の區となり、今の廣東・廣西・安南の地は、再び南越に歸し、其北今の福建の地に閩越興り、閩越の北、今の浙江の地に東甌興りしが、閩越最も强く、東甌を併せ、又南越を侵す。南越救を漢に請ひしかば、武帝は兵を發して閩越を平定し、(五百二十六年)後復南越の內亂あるに乘じ、之を滅ほして悉く其地を併せり。(五百五十年)

夜郎國及滇國漢に內降す

楊子江の上流に當れる、今の四川、貴州、雲南の地も亦、夙に交趾支那人種、殊に圖伯(ベット)特人種の占領に歸せしが、武帝の時、唐蒙始めて蜀(四川省成都府附近一帶)より夜郎國(貴州省遵義府附近一帶)に通じて、之を漢に內屬せしめ、(五百三十一年)尋で張騫西域より歸るに及んで、武帝は蜀の西南に身毒(シンドゥ)國(即ち印度)あるを聞き、張騫をやりて其通路を求めしめ、志を遂げざりしも、始めて滇(シン)國(雲南省雲南府附近一帶)に達するを得て、之を漢に內屬せしめしかば、(五百三十九年)西南蠻は概ね漢の羈縻する所となれり。

古朝鮮の起源

(第二)古朝鮮との關係　曩に殷の亡ぶるや、其王族箕子は

武帝古朝鮮を滅ぼす

我國及三韓と漢との交通漸く開く

遼東に往き、推されて古朝鮮の王となれり。當時古朝鮮の地は、西は遼河より東は浿水（大同江）の間に跨り、箕子の子孫世〻王險城（平安道平壤府）に治して斯に君臨せしが、箕準の世に至り、燕人衛滿之を襲ひ、代りて古朝鮮の王となる。（四百六十七年）其孫衛右渠の時、屢漢の命に抗せしかば、武帝海陸の大軍を發して之を滅ぼし、其地を郡縣となせり。（五百五十三年）

古朝鮮の南、今の朝鮮半島の南部一帶には、韓人種蕃殖し、大別して馬韓、辨韓、辰韓の三部となり、馬韓は今の京畿、忠清、全羅三道の地を占め、辰韓は慶尚道の東北部、辨韓は其西南部に據りしが、武帝古朝鮮を滅ぼしてより、漢と三韓との關係漸く頻繁となり、從うて三韓と交通し來れる我

匈奴の冒頓

國人と、漢との交通も亦、此頃より開け、西漢の末、東漢の初に至りては、我九州地方の酋長等漢に私貢して、其印綬を受くる者あるに至れり。

第四章　匈奴の盛衰

武帝の時に當り、塞外に雄視せしは匈奴にして、武帝が外征の目的も、其實之が跋扈を制するに在りければ、已に西南蠻を平げ、古朝鮮を滅ぼしてよりは、一意北に嚮うて匈奴の征伐に從へり。

匈奴は戰國の末より崛起せし土耳古人種の一種にして、其君主を單于（ゼンウ）といふ。天子の謂なり。西漢の初め、冒頓（ボクトツ）匈奴

匈奴と漢との交渉

に單于たりしが、武畧ありて東は東胡を却け、西は月氏を破ぶりて大に領土を擴め、其子老上、其孫軍臣其後を承けて、月氏の地を奪ひしかば、其領地東は今の滿州より、西は今の圖伯特の間に跨り、天山南北兩路の諸國も皆之に役屬せり。是に於て匈奴は其勢を負ひ、頻年漢の北邊に入寇せしが、漢は高祖以來、歳幣を贈りて其鋒を避けしかば、匈奴益〻專横となれり。武帝位に即くに及んで、前代の怨を報ぜんと欲し、さきに匈奴に逐はれたる月氏と同盟して、匈奴を夾擊せんが爲に、張騫をして西月氏國に使せしむ。(百五十二年)

張騫月氏に使す

是より先き、希臘にアレキサンドル出でゝ波斯を滅ぼし、亞細亞の西部を併呑して、一大帝國を建てしが、幾ならずして死せしかば、部將セリユクス代りて其地を領し、シリアを王となれり。(三百四十八年)其後シリアの國威振はざるに及んで、其屬地なる大夏、安息の二國皆獨立せり。(四百五年)大夏は所謂バクトリア國にして、今の阿母河の兩岸を占め、安息は其西に當りて、裏海の沿岸を領し、所謂パルチア國なり。大夏は後安息に敗られ、其國力頓に衰へし時、月氏は匈奴に逐はれて西に遁がれ、大夏を征服して其地を奪へり。

大夏と安息と

月氏はもと河西(黄河以西甘粛の地)の地に據りし圖伯特人種なり。秦、漢の際、其勢殆ど匈奴と相當りしも、後頻に匈奴の爲に敗亡せしかば、餘衆遂に西に奔り、暫く今の伊犁地方に

匈奴月氏及烏孫の關係

大月氏國の建設

武帝時代に於ける西域の狀躰

據りしが、曩に月氏の河西に在りし時、其隣國烏孫を苦めしを以て、烏孫は今や前日の怨を報ぜんが爲に、匈奴の援兵を乞ひ、月氏を破りて伊犂の地を占領せり。月氏は更に南に遁がれ、嬀水（阿母河）の濱に到り、大夏を臣服せしめて大月氏國を建て、（五百三十三年）安息と境を接するに至れり。

是故に張騫の西に使せし當時の狀躰を見るに、葱嶺の西に在りては、安息、大月氏の二國最も强く、大月氏の北には大宛國ありて、今の費爾干地方を占め、更に其北に康居國ありて、今の吉利吉思荒原附近を領し、康居の東南、大宛の東に烏孫國ありて、今の伊犂地方を占めたり。烏孫の東南より、匈奴の西邊に當りて、疏勒（喀什噶爾附近）于寘（和闐）龜茲（庫車附近）焉

武帝連に匈奴の地を畧す

耆（喀喇沙爾附近）以下の小國、すべて卅餘國ありしが、此等の諸小國は、烏孫、康居、大宛と共に、皆匈奴に臣服しければ、張騫は中途にして、匈奴に囚はるゝこと十年に餘りしも、遂に脫して大月氏に至り、攻守同盟の策を說きしも、大月氏は已に肥沃の地を占めて、復戰爭を好まざりしかば、遂に要領を得ずして歸れり。（五百三十五年）

武帝は大月氏との同盟に失敗せしも、其間李廣、衞靑、霍去病等の諸名將に命じて、屢匈奴を破り、遂に河南、河西の地を收めて、朔方、武威、張掖、酒泉、燉煌の諸郡をおき、更に燉煌（甘肅省安西州燉煌縣）より、輪臺（天山南路玉古爾）に至る間に、屯田兵を配置せしかば、天山南路の諸國は、前後漢に歸服するに至れり。

漢と烏孫との同盟

天山南路の道通じたれば、武帝は更に烏孫に說きて同盟を結ばんとす。烏孫は曩に匈奴の助を得て、伊犂地方を占領せしも、勢を得るに從うて、漸く匈奴と隙ありしかば、直に漢の勸の應ぜり。(十五百五六年)

鄭吉初めて西域都護となる

武帝は匈奴討滅の素志を遂げずして死せしも、(十五百七四年)宣帝其後を承け、烏孫と同盟し、大に匈奴を擊破して、其牛馬七十餘万頭を奪へり。(十五百九十年)是に於て、從來匈奴に臣屬せし西域諸國は、皆叛きて漢に歸せしかば、宣帝始めて鄭吉を西域都護に拜し、烏壘城(天山南路の策特爾)に在りて、西域一帶を統御せしむ。(六百一年)

匈奴の內訌

匈奴は外漢に敗れ、又內亂起りて骨肉相平がず。老上單于五世の孫なる呼韓邪單于は、其兄郅支單于と爭ひしが、敗亡して漢に來降し、其保護に賴りて郅支を破ぶる。郅支は西に遁がれ、康居國王に依りて恢復を圖りしかば、當時の西域都護甘延壽は、副將陳湯と謀り、急に襲うて郅支を殺せり。(六百二十五年)是より匈奴の勢威全く衰へ、呼韓邪單于は漢に歸服して、復邊に入寇せず。

匈奴漢に歸服す

第五章　西漢の末路

武帝諸新法を行うて財源を求む

武帝頻年兵を塞外に用ゐ、又方士の說を信じて、宮觀を建て、巡遊、封禪を事とせしかば、國用給せず。是に於て桑弘羊等の理財に長せる者を登庸して、或は人民に錢を納れて

宣帝の中興

官爵を買ひ、又死罪を贖ふを許し、或は民間にて、鐵器を鑄、海鹽を煮、若くば飲酒を釀すを禁じ、皆之を官の專業とし、或は舟と車とに課稅して、偏に賦歛を重くせしかば、百姓疲弊して所在に盜賊起れり。

武帝の後、少子昭帝嗣ぐ。(五百七十五年)霍光遺詔を受けて政を輔け、賦稅を輕くして專ら民と休息せり。昭帝の後二傳して、宣帝位に即きしが、(五百九十八年)尤も意を國治に用ゐ、官吏の治績ある者には、璽書を賜ひて奬勵せしかば、中央政府にも、地方にも良吏輩出して太平を致せり。

宣帝已に內治に勤め、又邊備を忽にせず。趙充國をして、先零以下の諸羌を擊ちて、青海附近の地を取らしめ、又鄭吉、

宦者外戚相繼ぎて朝政を執る

外戚王莽西漢を簒ふ

陳湯等を任用して、頻に國威を西域に張り、實に西漢中興の主なりしが、子元帝立つに及んで、(六百十三年)多病にして、政を宦者石顯等に委ねしより、漢業漸く衰へ、尋で成帝其後を承け、(六百二十九年)石顯等を黜けしも、外戚王鳳を信任せしかば、外戚宦者に代りて政權を擅にし、遂に西漢覆滅の漸を啓けり。

成帝の後二傳して平帝に至る。時に王鳳の從子王莽は、其女を納れて皇后となし、朝政を專にす。王莽固より逆望を抱き、士を養ひ賢を禮して世を欺きしかば、名聲益〻隆となり、上書して其德を頌する者、四十八万人の多きに及べり。是に於て彼は遂に平帝を弑し、其後幾ならずして自から

帝位に即き、國號を改めて新と稱せり。（六百六十八年）

第六章　東漢の復興

劉秀兵を擧ぐ

王莽已に帝位に即きしが、諸般の制度一に周の古代に倣はんとして、反つて法禁を密にし、賦斂を重くせしかば、幾ならずして天下大に亂れ、山東、江淮の間には、赤眉の兵起り、湖北には綠林の兵起れり。漢の王族劉秀も亦、兵を舂陵（湖北省襄陽府棗陽縣）に擧げて綠林の兵に應じ、（六百八十二年）兵勢愈盛となりしかば、彼等は遂に漢の王族劉玄を擁して帝位に即かしめ、西長安に入りて王莽を殺せしが、赤眉の兵更に後より襲うて、帝劉玄の軍を破ぶり、長安を占領せり。（六百八十五年）

劉秀帝位に即く

光武帝學術を尙び名節を奬む

是より先き、劉秀は帝劉玄の命を以て、河北の地を平定し、因りて窃に自立の計をなせしが、遂に帝位に鄗南（直隷省趙州栢鄉縣）に即く。（六百八十五年）之を光武帝となす。尋で都を洛陽に奠む。洛陽は長安の東に在るを以て、史に之を西漢と區別して東漢と稱す。是に於て先づ兵をやり、赤眉の賊を擊破して關中を平定せしめ、尋で隗囂（カイガウ）を隴西（隴山の西今の甘肅省の南部一帶）に破り、竇融を河西に降し、公孫述を四川に滅ぼして、遂に天下を一統せり。（六百八十六年）

天下一統の後、光武帝は專ら意を國治に用ゐ、西漢の末、外戚權を弄せしに懲りて、國政を親らし、又學校を興こし、名節を勵ませしかば、東漢一代の間、學術頗る盛にして、節義

の士も亦多かりき。光武帝の後、子明帝、孫章帝皆よく父祖の遺業を紹ぎ、其間凡そ卅餘年間、天下頗る無事なりしが、方に此時に際して、佛教は印度より東漸して、支那に傳來せり。

第七章　佛教の傳播

阿利安人種の南下

曾て阿母、西爾兩河の間に蕃殖せし阿利安人種の一部は、今より凡そ四千年前の太古に、此故土を離れて、南印度河沿岸の地に移住せしが、其人口次第に增加して、祭式の繁褥となりしと、在來の土人の度羅毘陀と衝突せしと、此二事情より移住民の中に、外に向うて戰爭を世業とする刹帝利種姓と、內に在りて祭事を世業とする波羅門種姓とを生じ、自餘の大部は、農耕に、商賈に、すべて其身を實業に委ね、又土人にして阿利安人種に服從せし者は、奴隸となりて賤役に就き、此の如くして阿利安人種が、恒河（今の恒河）の流域を全く占領せし頃には、其國民中に左の如き四等の種姓を生ぜり。

四種姓の區別

種名	族籍	職掌	人種
1 波羅門	僧族	祭祀を掌る	阿利安人種
2 刹帝利	王族	軍國の事を掌る	
3 吠舍	平民	實業に從事す	
4 首陀	奴隸	賤役に服す	非阿利安人種

波羅門の專横

中に就きて、波羅門は親しく祭事を掌どり、殊に阿利安人種が太古より傳來せる聖典、吠陀を暗誦せしを以て、自から全國民の尊敬を受けしが、年月を經るに從ひ、彼等は一層其種姓を神聖にせんとて、其勢力を濫用して、遂に摩奴の法典を規定し、自餘の種姓を抑壓して專横を極めしかば、國民漸く之に反抗するに至れり。

釋迦の革新

時に中印度、迦比羅城（今の泥波羅「ルミンデイ」附近）主の子に、悉達喬答摩ありしが、（九十五年）夙に厭世の念を抱き、遂に家を棄てゝ山に入り、解脱の法を求めて佛陀となる。彼はもと釋迦種族より出でゝ、解脱得道せしが故に、爾來釋迦牟尼の稱號を得たり。彼は波羅門に反對して、新に佛教を開き、種姓の差別を破り、平等の主義を唱ふること、四十餘年にして死せり。

第一回及第二回の結集

（百七十四年）其弟子等直に王舍城（今の「ビハル」の西南）に會して、第一回の結集を催し、尋で第二回の結集を毘舍離に開き（二百七十四年）汲々として祖師の教法を擴張するに從事せしかば、波羅門の爲に屈辱を被りし諸種姓は、皆此新宗教を歡迎せり。

旃陀羅笈多と「セリュクス」と

釋迦の死後凡そ百五十年にして、希臘王アレキサンドル波斯より印度に侵入し、（三百三十三年）西、北兩印度を畧し、更に中印度を征せんとせしも、暑氣甚しきを以て、守兵を留めて軍を還へし、幾ならずして病死せしが、旃陀羅笈多なる者、此侵入によりて、中印度の騒擾せるを機とし、摩揭陀國を占領して、華子城（今の「パトナ」）に都し、更に希臘の殘兵を驅逐せ

阿育王の布教

第三回の結集

中印度に於ける佛教

り。(三百三十六年)是に於てアレキサンドルの部將にして、當時シリア王となりしセリュクスは、印度に來りて笈多と戰ひしが、後其女を彼に妻はして和を講ぜり。是より笈多の勢威、中、北、西三印度を壓せしが、其孫阿育(アショカ)王、摩揭陀に君臨するに及んで、(三百九十一年)厚く佛法に歸依し、內は國都に第三回の結集を催し、當時摩揭陀の用語たりし巴梨(パーリ)語を以て佛典を錄し、外は宣教僧を諸外國に派遣して、偏に佛法の擴張を圖りしかば、印度は固より、西は大夏より、南は獅子國(今の錫蘭島)に至る迄、皆佛教の感化を仰ぐに至れり。

阿育王の死後、摩揭陀の國王の更立頻繁なりしが、其間に案度羅(アンドラ)王家南印度より來りて、遂に中印度を併呑せり。(六百三十五年)是より先き、波羅門種姓は佛教の興起によりて、一大痛打を受けしが、是に至りて漸く案度羅王家の保護を得、佛教は之と共に、やゝ其勢を中印度に失へり。

南北佛教分裂の由來

釋迦の出世以前よりして、恒河以北の地には、非阿利安人種多く割據し、河南は全く阿利安人種の占領に歸せしかば、佛教の恒河の南北に流布するに從ひ、勢ひ分離の傾向を免れず。唯中印度に雄視せし摩揭陀國王が、佛教の保護者となり、從うて恒河以南の地は、佛教流行の中心となりしを以て、河北の佛徒は、常に河南の佛徒に屈服せられしが、今や後者の振はざるを機とし、河北の佛徒は、頻に自派の勢力を增進することを圖れり。

大月氏印度に入る

曩に大月氏は大夏を擊破して、嬀水附近の地を占領せしより國勢日に强く、皇紀七百年の頃、迦膩色迦其國王となるに及んで、遂に南侵して西、北兩印度を畧せり。大月氏は阿育王の外國布教以來、已に佛教を崇奉せしが故に、迦膩色迦王も亦厚く佛法に歸依し、第四回の結集を北印度の罽賓（迦濕彌）に開けり。恒河以北の佛徒は、非阿利安人種なる迦膩色迦王の保護を喜びて、多く此結集に會せしも、彼等は雜駁なる非阿利安人種に屬し、從うて其用語區々なりしかば、已むを得ず、古來公文に慣用せし梵語を以て佛典を錄せり。但河南の佛徒、殊に獅子國の佛徒等は、第三回に於ける巴梨語の結集を證典として、此結集に加はらざり

迦膩色迦王の第四回結集

南方佛教と北方佛教と

しが故に、佛教は是より判然南、北兩大部に分かれ、南方佛教は獅子國を中心として、後印度諸國及南洋諸島に傳はり、北方佛教は罽賓を中心とし、中央亞細亞より天山南路の諸國に流れたり。時恰も後漢の明帝は、鋭意地を西に開きしを以て、佛法は次第に東漸の機會を得たり。

匈奴南北兩部に分かる

第八章　東漢の極盛

西漢の宣帝以來、匈奴は久しく邊に寇せざりしが、王莽西漢を簒うて以來、騷亂相踵ぐを機とし、復北邊に入寇し來れり。已にして匈奴は南、北二部に分かれ、南匈奴は微弱にして、早く東漢に歸服せしも、（七百八年）北匈奴は其勢益强く、西

班超西域を定む

班超西域都護となる

域諸國を威服して、屢邊を擾しゝかば、明帝遂に竇固等を
して、之を蒲類海（天山南路の巴爾庫勒）に破らしめ、（七百三年）又班超を
遣り、西域諸國と同盟して、北匈奴を挾擊せんことを圖ら
しむ。班超先づ于寘、疏勒の諸國を招致し、其兵を併せて更
に焉耆、龜茲の諸國を擊破せしかば、西域五十餘國は、北匈
奴に背きて皆漢に降れり。是に於て復西域都護府を龜茲
に開き、班超を以て之に任ぜり。（七百五十一年）
西域諸國離叛してより、北匈奴の勢衰微せるに乘じ、漢將
竇憲大擧して之を擊破せしかば、（七百四十四年）其餘衆は遠く西、
裏海の濱に遁れ去り、東胡の一種なる鮮卑は、東より移り、
代りて其地を占領せり。

北匈奴の滅亡と鮮卑の移轉と

班超大秦に通ぜんとす

西域都護をやむ

絹布の販路

北匈奴は殆ど滅亡し、西域諸國は已に歸服し、漢威方に葱
領の東西に遍き時に當りて、羅馬帝國は頻に地を東に擴
めて、屢安息を破りしかば、班超は其富强を聞き、部將甘英
をやりて大秦に通ぜしむ。大秦は即ち羅馬なり。然れども
安息の爲に妨げられて意を果さず。（七百六十二年）尋で班超死し、
西域諸國並び叛きしかば、漢廷議して西域都護府を廢せ
り。（七百六十七年）然れども漢の威令一時西域に普及せし結果と
して、重要なる二大事變起れり。即ち海上の交通と、佛敎の
傳來となり。

（第一）海上の交通　支那は世界に於ける絹布の本産地に
して、其絹布は夙に支那以西の諸國民の手を經て、販路を

大秦王安敦支那に通ず

波斯、印度の市場に開きしが、アレキサンドルの東征以來は、更に歐洲に將來せられて、大に其嗜好に投ぜり。（絹布即ち繒見は、支那音にて「セル」なるが故に、當時歐洲人は、支那を指して「セリカ」といふ。絹の産地の義なり。其國民を指して「セレス」といふ。絹商人の義なり。）然れども轉々諸國民の手を經るが故に、其價頗る不廉なりしを、東漢の初世より、羅馬帝國は頻に其領土を西方亞細亞に擴め、遂に波斯灣頭の地を取るに及んで、大秦王安敦（アントニウス）は、海路使を發し、日南（今の交趾支那附近）を經て、東漢に通ぜり。（八百二十六年）爾後三國の頃に至る迄、大秦の商人等多く日南、交趾（東京地方）に來りて、貿易に從事せしが、西晉の末、支那に内亂相繼ぎ、加ふるに此等地方の支那官吏は、貨賂を貪り、重稅を課せしを以て、外國貿易は遂に衰微せり。

佛法大月氏より支那に入る

外國の僧侶支那に來る

（第二）佛法の傳來　西漢の頃より、佛法やゝ支那に傳はりしも、其流通盛ならざりしを、東漢の明帝の時、大月氏は佛法流行の中心たりしを以て、蔡愔（サイイン）をやり佛法を求めしむ。彼は大月氏より佛經と攝摩騰、竺法蘭の二僧とを得て歸り、洛陽に白馬寺を建てたり。（七百二十七年）其後漢威西域に遍く、東西交通の路開くるに及んで、外國僧侶の印度、安息、康居、大月氏等より、海路或は陸路をとりて、支那に布教を試むる者多く、東漢の末年に至りて、佛法の感化は殆ど支那全土に普及せり。

第九章　東漢の末路

東漢衰頽の由來

光武帝、明帝、章帝三代の間は、東漢の國運頗る盛なりしも、和帝年甫めて十歲にして、章帝の後を承くるに及んで、(七百四十八年)外戚漸く國政に干渉するに至れり。和帝以後東漢の諸帝は不幸にして短命多く、從うて幼主其後を承け、母后朝に臨みければ、外戚と宦者とは專權の機會を得、遂に東漢の滅亡を促せり。和帝より六傳して桓帝に至る。(八百七年)此間六十年、外戚常に國政を擅にせしが、桓帝の時、外戚梁冀專横尤も甚だしかりしかば、桓帝は宦者單超と謀りて之を誅戮せしも、(八百九年)宦者是より其功を負ひ、外戚に代りて朝廷に跋扈するに至れり。

外戚及宦者の專權

初め光武帝名節を奬勵せしより、東漢の人士は一般に氣

東漢人士の氣風

概を尚びしが、宦者國政を擅にするに及んで、當時の名士李膺、陳蕃等、大學の諸生を率ゐて、痛く之に反抗を試みしかば、宦者は桓帝に誣告して、名士二百餘人を捕へ、其終身を禁錮せり。之を東漢の黨錮といふ。(八百二十七年)

東漢の黨錮

宦者内に跋扈し、名士外に禁錮せられて、太平の望絶ゆると共に、叛亂四方に起る。就中張角は妖術を以て衆を誘ひ、亂を山東に起す。之を黄巾の賊といふ。(八百四十四年)皇甫嵩一旦之を擊破せしも、其餘衆四方に出没して鎭定を見ず。朝廷是に於て、重臣を出して地方を鎭壓せしめしより、遂に群雄割據の基を開けり。

黄巾の賊

桓帝より二傳して、章帝五世の孫なる帝辨位に即くに及

袁紹宦者を誅す

んで、外戚何進は袁紹と謀り、四方の猛將を招きて、悉く宦者を族誅せり。（八百四十九年）是時董卓も亦、宦者を誅するを名として京師に來り、遂に帝辨を廢し、其弟献帝を擁立して權威を專にせしが、袁紹に敗られ、帝を挾みて西長安に遷り、幾ならずして殺戮に遇ひ、其餘黨互に難を搆へて、關中大に亂れしかば、献帝は遁れて洛陽に歸れり。（八百五十六年）

董卓献帝を挾みて西に遷る

群雄の割據

曩に献帝の西に遷りてより、天下殆ど無政府の有樣となり、群雄四方に割據す。袁紹は河北の地を占め、曹操は山東を有し、今の河南安徽の地は、袁紹の從弟袁術の有に歸し、劉表は今の湖北に據り、孫堅は湖南に據りしが、袁術と袁紹とは、其門地、聲望を等しくせるを以て相善からず。袁紹は劉表と結び、袁術は孫堅と結びて攻爭を事とする間に、獨り曹操は窃に雄飛の機を伺ひ、獻帝の洛陽に歸るや、之を許（河南省開封府許州）に迎へ、天子を擁して天下に臨みしかば、其勢威頓に强大となり、袁術、袁紹を滅ぼし、更に當時内蒙古の東部一帶に跋扈せし、東胡の一種なる烏桓を擊破して其地を奪ひ、更に南に向うて、劉表の子劉琮を降しゝかば、江北の地は悉く曹操の有となれり。（八百六十八年）

曹操献帝を擁して群雄を征す

時に漢の疎族に劉備ありて、劉表に依りしが、劉琮曹操に降るに及んで、謀臣諸葛亮は劉備に勸め、江を渡り孫權と共に曹操を防がしむ。孫權は孫堅の子にして、夙に江南を占領せしが、是に於て劉備を納れ、其將周瑜をして、大に曹

劉備と孫權と

赤壁の戰

曹操、孫權、劉備天下を三分す

東漢の興亡

操の軍を赤壁（湖北省武昌府嘉魚縣）に破らしめしかば、曹操遂に北に歸れり。（八百六十八年）已にして劉備は又孫權の後援を請ひ、巴、蜀の地を平定し、更に漢中を奪へり。漢中の北なる關中の地は、曩に曹操の征服する所となりければ、四方の群雄今や滅亡し、曹操、孫權、劉備各一方に割據して、天下三分の形勢成れり。故に之を三國の世といふ。

第十章　三國の鼎立及西晉の興亡

是時東漢の獻帝は、尚ほ虛位を擁せしが、曹操の子曹丕嗣ぐに及んで之を廢し、自から帝位に洛陽に即けり。（八百八十年）之を魏の文帝となす。是に於て劉備は帝位に成都に即く。

諸葛亮魏を伐つ

司馬氏魏の政權を握る

（八百八十一年）之を蜀漢の昭烈帝といひ、孫權も亦帝を建業（江蘇省江寧府）に稱す。（八百八十二年）之を吳の大帝といふ。

曩に劉備の巴、蜀に入るや、義弟關羽を江陵（湖北省荊州府）に留めて、孫權と曹操とに備へしめしが、後孫權の爲に襲はれて敗死せしかば、昭烈帝自から大軍に將として吳を伐ちしも、反つて大敗して死し、諸葛亮は其子帝禪を輔けて先づ吳と和し、（八百八十三年）力を專にして魏を伐つこと前後七年、魏將司馬懿よく防ぎしかば、諸葛亮其志を遂げずして死せり。（八百九十四年）

魏は文帝の子、明帝の死後、司馬懿國政を執り、權勢日に强く、殊に文帝、明帝皆刻薄にして、骨肉を疎害しければ、帝室

西晉三國を一統す

孤立し、容易に司馬氏簒奪の地をなせり。司馬懿の子、司馬昭の時、鄧艾等をやり、蜀漢を襲うて之を滅ぼしゝより、(九百二十三年)其威望益高く、司馬炎其後を嗣ぐに及んで、遂に魏を簒うて帝位に即く。之を西晉の武帝といふ。(九百二十五年)武帝尋で兵を遣りて吳を滅ぼし、(九百四十年)此の如くして西晉始めて天下を一統せり。

八王の亂

武帝天下を一統して後、魏の敗亡に懲り、子弟を要地に封じて、帝室の藩屏となすに熱中し、反つて後年諸王跋扈の患を釀せり。武帝死し、(九百四十九年)子惠帝立ちしが、暗愚なりしかば、皇后賈氏朝政に干渉し、紀綱大に壞れたるに乘じ、汝南王亮、楚王瑋、趙王倫、齊王冏、河間王顒、成都王穎、長沙王乂、東海王越等兵を擧げ、各政權を擅にせんが爲に、相攻爭するもの十六年、之を八王の亂といふ。是に於て晉室の藩屏全く壞れたり。殊に當時老莊の學大に行はれ、所謂清談の風流行せしかば、天下の人士皆世事を放擲し、遂に一人の國家を憂ふる者なし。方に是時に際し、夷、狄四方に起りて、頻に內地に逼りしかば、晉室大に覆り、僅に其餘喘を建業に保つに至れり。(九百七十七年)建業は洛陽の東南に當れるが故に、史家之を東晉といひ、以て西晉と別つ。而して江北一帶の地は、爾來殆ど三百年間、塞外諸人種の占領に歸せり。

西晉の滅亡と東晉の建國と

第十一章　塞外人種の侵入

塞外人種侵入の由來

兩漢の際、支那の疆域の廣大となると共に、塞外諸人種の徙りて、內地に來る者漸く多く、之につぎて東漢の末、三國の間、支那國內の擾亂甚しく、殊に西晉の武帝は、天下を一統して後、州郡の武備を撤去せしかば、彼等の塞內に移住する者益多きを加へ、就中匈奴、鮮卑、氐、羌最も强大なり。

匈奴人種山西に彌蔓す

(第一)匈奴　東漢の初め、南匈奴內降してより、其山西の塞內に入りて、漢人種と雜居する者、前後万部落に及びしが、歲月を經るに從ひ、戶口繁滋し、西晉の初に至りては、山西の地大半匈奴の占領する所となれり。

(第二)鮮卑　鮮卑は古の東胡の一種なり。東胡の匈奴に擊破せらるゝや、其餘衆烏桓山(內蒙古阿嚕科爾沁部の西)に走りしを烏桓と鮮卑と

桓部となし、鮮卑山(內蒙古科爾沁部の西)に走りしを鮮卑部となす。東漢の世、北匈奴の滅亡するや、烏桓と鮮卑とは東より徙りて其地を占領せしが、烏桓は後曹操の爲に征服せられて衰微せしも、鮮卑は其勢日に强大となり、東は滿州より、西は河西に至るまで、支那北邊一帶の地を奄有せり。

氐、羌人種關中に彌蔓す

(第三)氐及羌　氐、羌共に圖伯特人種に屬し、羌はもと青海附近に生息し、氐は巴、蜀の間に散在せしが、東漢の世に、關中、河東の地に移住する者頗る多く、三國、西晉の際に至りては、氐、羌種族の關中に存る者、殆ど漢人種と相半するに至れり。

西晉の時、塞外諸族の內地に雜居する者、此の如く多かり

匈奴の劉淵帝を稱す

しが、八王の亂起るや、匈奴の酋劉淵先づ亂を山西に起こし、(九百六十四年)尋で帝位に平陽(山西省平陽府)に即き、國號を漢と稱す。(九百六十八年)劉淵の子劉聰嗣ぐに及んで、一族劉曜及匈奴の別種の羯人なる石勒等をして、連に西晉を攻めしむ。西晉は惠帝の後、懷帝、愍帝の二主相繼ぎて帝位に即きしも、皆漢軍の囚ふる所となりしかば、司馬懿の曾孫なる司馬睿は、位に建業に即き、僅に江南の地を保つ。之を東晉の元帝といふ。(九百七十七年)

前趙と後趙と

漢は一時江北一帶を占領せしも、劉聰の死後内亂起り、劉曜は長安に自立して國を前趙と號し、石勒も亦襄國(直隷省順德府臺縣)に自立して國を後趙と號し、劉曜と相爭ひ、石勒遂に勝ちて江北を統一せしが、(九百八十八年)其死後幾ならずして復内亂起りしかば、氐酋符洪は關中に自立して前秦王と稱し、漢人張重華は河西に據りて前涼王と稱し、後趙の領土は分裂して、群雄割據の區となれり。

後趙の分裂

是より先き、鮮卑の慕容部は、遼西、遼東を併せて勢日に強大となりしが、慕容皝部酋となるに及んで、棘城(盛京省錦州府義州)に據り、國を前燕と號せり。(九百九十七年)子慕容儁嗣ぎ、後趙の内亂に乘じて悉く河北の地を奪ひ、(千十二年)尋で都を鄴(河南省彰德府臨漳縣)に移せり。

前燕の建國

東晉初世の形勢

東晉の元帝の位に建業に即くや、王導に國政を任じ、其從兄王敦に軍事を委ねしより、王氏の勢日に强く、王敦は遂に異志を抱きて、兵を武昌（湖北省武昌府）に擧げたり。（九百八十二年）其亂幸に鎭定せしも、尋で蘇峻の叛あり。かく內に反亂相繼ぎしを以て、未だ江北の恢復に從ふ能はざりしが、桓溫軍事を統ぶるに及び、始めて北伐の軍を起し、先づ巴、蜀の地を恢復せり。（千七年）

桓溫巴蜀を定む

匈奴の劉淵兵を起こしゝ時、氐酋李雄も亦叛旗を巴、蜀の地に翻へし、（九百六十四年）國號を成と稱し、尋で漢と改めしが、其從子李勢立つに及んで、淫虐にして人心離畔せしかば、桓溫は一擧して之を滅ぼし、勢に乘じて中原を恢復せんと欲し、後趙亡びて、江北の群雄相攻爭せるを機とし、先づ前秦を關中に伐ちしが、（千十四年）功なくして兵を收め、更に前燕に嚮ふ。時に慕容儁の子慕容暐位に在りしが、其叔父慕容垂大に桓溫の軍を枋頭（河南省衞輝府濬縣）に破りしかば、桓溫遂に南に歸れり。（千廿九年）是に於て慕容垂の威名日に盛となり、慕容暐之を疎外しければ、彼は前秦に降れり。

桓溫更に前秦前燕を伐つ

是時符洪の孫、符堅前秦に王たりしが、慕容垂來奔するに及んで、王猛をやり鄴を襲うて前燕を滅ぼし、（千三十年）尋で前涼を河西に伐ちて、其都城姑臧（甘肅省涼州府）を陷れ、（千卅六年）更に呂光に命じ、焉耆、龜茲以下の西域諸國を平定せしむ。是に於て江北の地を擧げて符堅の有に歸し、東は高句麗、新羅よ

前秦の符堅江北を一統す

淝水の戰

り、西は葱嶺に至るまで、塞外の六十餘國悉く前秦に來貢せしかば、符堅は江南を併せて、天下を一統せんと欲し、遂に百万の大軍を發して、江淮の地を侵しゝが、反つて晉將謝玄の爲に淝水（安徽省鳳陽府壽州）に大敗し、（千四十三年）僅に身を以て免れしも、尋て叛者の手に斃れ、幾ならずして前秦滅亡せり。（千五十四年）

前秦の滅亡と群雄の割據と

符堅の江北を一統するや、鮮卑、西羌諸族の其朝に仕へし者頗る多かりしが、一旦敗亡するに及び、皆背き去りて一方に割據す。鮮卑の慕容垂は中山（直隸省定州）に據りて後燕國を建て、（千四十四年）羌酋姚萇は、長安に據りて後秦國を建て、（千四十四年）鮮卑の乞伏國仁は、西秦國を隴西に建て、（千四十五年）鮮卑の拓跋珪も亦、盛樂（山西省歸化城の南）に據りて國を後魏と號し、（千四十六年）氐酋呂光は、河西に後涼國を建つ。呂光は曩に符堅の命を承けて、西征の途に就きしが、其敗亡を聞くや、遂に姑臧に自立せり。（千四十六年）其他鮮卑の禿髮烏孤は、青海の地に南涼國を建て、（千五十七年）匈奴の沮渠蒙遜は、張掖（甘肅省甘州府）に據りて北涼國を建て、（千五十七年）漢人李暠は其西燉煌に據りて西涼國を建つ。（千六十年）是に於て當時群雄の江北に割據する者凡そ八國、就中後魏最も強大にして、連に後燕を破ぶり、拓跋珪遂に帝位に平城（山西省大同府）に即く。（千五十八年）之を後魏の道武帝となす。

後魏の道武帝

後燕の敗るゝや、其餘衆龍城（內蒙古土默特右翼の西）に走りしが、漢人

劉裕の北伐

馮跋其衆を服して北燕國を建つ。(千六十九年)時に慕容垂の弟慕容德も亦別に山東の地に南燕國を建て、(千五十八年)屢〻南して東晉を侵しゝかば、晉將劉裕遂に之を滅ぼせり。(千七十年)是より先き匈奴の赫連勃々、朔方に據りて國を夏と號し、(千六十七年)連に後秦を苦しむるを機とし、劉裕は更に西關中に入りて後秦を滅ぼせり。(千七十七年)劉裕もと簒奪の大志を懷きければ、今や其北伐の功を負うて南に歸り、遂に東晉の祚を移して帝位に建康(即ち建業)に即く。之を宋の武帝となす。(千七十九年)晉は東西合せて百五十六年にして亡べり。

東晉の滅亡

後魏の太武帝江北を一統す

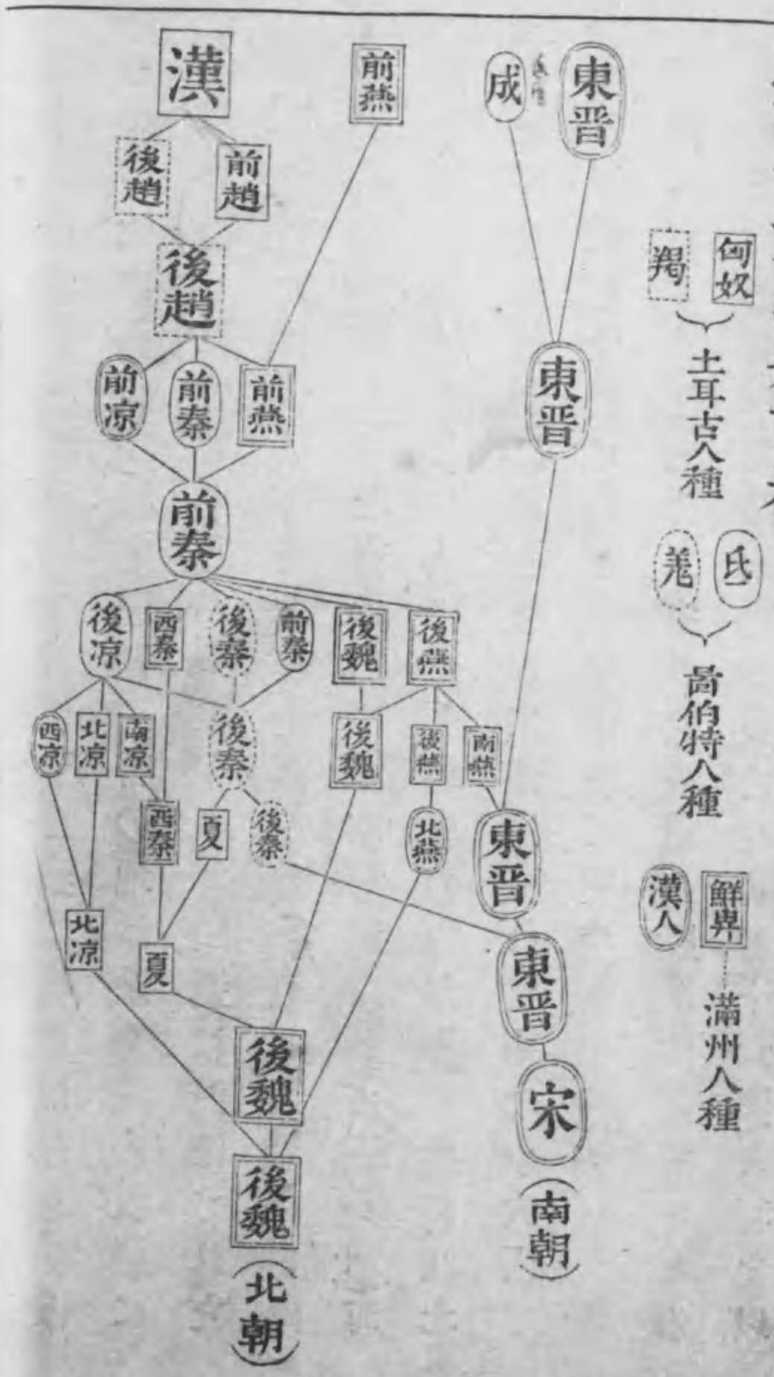
後魏は道武帝の孫、太武帝位に即き、(千八十四年)勇畧あり。先づ夏を關中に代つ。後秦滅び、劉裕南に還りてより、夏は悉く關中を占領し、尋で西秦を併はす。西秦は曩に南涼を滅ぼしゝが故に、(千七十四年)關中、隴西一帶の地は、悉く夏の版圖に歸し、國勢日に盛なりしが、是に至りて後魏に滅ぼされたり。(千九十一年)太武帝は尋で北燕を滅ぼし、(千九十六年)又北涼を降だす。(千九十九年)而して北涼は已に西涼を滅ぼして、(千八十一年)河西の地を一統せしが故に、今や北涼の亡ぶると共に、江北の地は全然後魏に歸し、支那本部は分れて南北兩大國となる。江北を北朝とし、江南を南朝と稱せり。

南朝及北朝

西晉の末より、江北の地、塞外諸人種の蹂躙する所となること斯に百卅年、其間大國の興亡せし者十六國、人種を以てせば五種、故に之を總稱して五胡十六國といふ。

五胡十六國

五胡十六國興亡表



西域諸國後魏に服從す

後魏の太武帝柔然を伐つ

第十三章　後魏の盛衰

三國以來二百餘年の間、支那は擾亂相繼ぎ、從うて西域諸國との通交甚だ稀少なりしが、後魏の太武帝畧江北を一統するに及んで、其國威遠く西域に振ひ、龜茲、疏勒、烏孫等の諸國皆來貢せり。但柔然は後魏に服せずして、屢邊境に入寇せしかば太武帝遂に大擧して柔然を伐つ。（千八十九年）柔然は故の匈奴の餘裔にして、戈壁の沙漠の南北に散居せしが、社崙初めて部衆に推されて、可汗（大君主の義）となりしより、國勢日に強大となる。社崙死し、從弟大檀繼ぐに及んで、大武帝は連に之を擊破して、殆ど內外蒙古の地を畧取

後魏の孝文帝の改革

せしかば、(千百七年)東は高句麗より、西は波斯の諸國に至るまで、皆後魏に朝貢せり。

南朝は宋の武帝の後、子文帝嗣ぎ、後魏の柔然と爭ふに乘じて北伐せしも、反つて大敗し、(千百十年)江北の地は概ね後魏に歸し、後魏の國勢益强大を加ふ。太武帝の後、賢主輩出せしが、後魏はもと夷狄より起りて、其國俗野鄙なりしかば、太武帝の玄孫、孝文帝位に即くに及んで、(千百卅一年)或は舊都平城を洛陽に遷し、(千百五十三年)朝廷の儀式は一切支那の國風により、本國の衣服、言語を用ゆるを嚴禁し、或は皇族を始め本國の臣民をして、漢人種と雜婚するを奬勵して、鋭意之が改革を圖れり。然れども國人は其舊風を慕ひ、改革を

後魏の衰亂

悅ばずして、漸く離叛の心を抱き、加之是より華侈、柔弱の風行はれて、國勢も亦初めて衰微せり。

孝文帝の孫、孝明帝位に即くや、(千七百十六年)其母胡太后政を攝し、淫亂にして嬖臣多く、遂に帝を憚りて之を毒弑せしが、胡太后も亦尋で臣下の弑する所となれり。高歡内亂を靖め、新に孝文帝の曾孫孝武帝を擁立せしも、其功を負うて專横なりしかば、孝武帝は長安に出奔し、宇文泰に依りて高歡を伐つ。高歡も亦孝文帝の曾孫、孝靜帝を洛陽に立てて之を拒ぐ。是に於て後魏は分れて東西となり、(千百九十五年)東魏、西魏の國名は尙ほ存すれども、其實權は全く高歡、宇文泰の手に歸せり。

高歡と宇文泰と

後魏の分裂

南朝の變遷

高歡死し、子高澄嗣ぎて東魏の政を執るに及んで、河南の鎮將侯景は其地を以て南朝に降れり。(千二百七年)南朝は宋の文帝より傳へて、其孫順帝に至りしが、權臣蕭道成之を廢して自から帝位に即く。(千百卅九年)之を齊の高帝といふ。然れども其從孫和帝の時、疎族蕭衍は禪を受けて帝位に即く。(千百六十二年)之を梁の武帝といふ。武帝は侯景の來降を納れて東魏を代ちしが、尋で又之と和せしかば、侯景は其反覆を怨みて直に建康を襲ふ。(千二百八年)當時梁は上下佛法に心醉して、武備を顧みざりしかば、國内忽ち解崩し、武帝は憂憤して死し、侯景遂に帝を稱せり。(千二百十一年)

侯景の反亂

時に武帝の子、蕭繹、武帝の孫、蕭詧、其弟、蕭綸等、所在に兵を起しゝも、各權を爭うて一致せず。蕭繹遂に蕭綸と蕭詧とを逐ひ、陳霸先等をして侯景を誅せしめ、位に江陵(湖北省荊州府)に即く。(千二百十二年)之を元帝となす。

東魏亡び北齊興る

東魏は高澄の後、弟高洋國政を執りしが、遂に簒立して帝位に即く。(千二百十年)之を北齊の文宣帝となす。文宣帝は蕭綸を納れて、連に梁の江淮の地を畧し、西魏の宇文泰も亦、蕭詧を助けて梁を侵し、遂に元帝を殺し、蕭詧を立てゝ梁王となし、今の湖北の地を領せしむ。(千二百十五年)之を後梁の宣帝といふ。實は西魏の一藩屏のみ。

後梁

梁亡び陳興る

元帝の死するや、陳霸先は其子、敬帝を建康に擁立して、江南の地を保ちしが、尋で之を廢し、自立して帝位に即く。(千二

西魏亡び北周興る

隋の文帝天下を一統す

百十七年）之を陳の武帝といふ。是時宇文泰死し、子宇文覺嗣ぎて西魏の禪を受く、之を北周の孝閔帝となす。是に於て陳、北周、北齊、後梁の四國天下を分領することゝなれり。

北周は孝閔帝の後、弟文帝繼ぎて勇畧あり。北齊の內亂あるに乘じて之を滅ぼしゝが、（千二百卅七年）其死後幾ならずして外戚楊堅國政を統べ、遂に北周を簒うて帝位に即く。（千二百四十一年）之を隋の文帝といふ。文帝先づ後梁を降し、尋で陳を滅ぼして天下を一統せり。（千二百四十九年）南、北朝相對立すること、斯に凡そ百五十年なり。

第十四章　隋の盛衰及唐の初世

煬帝大に土木を興す

煬帝又外征を企つ

隋の文帝位に即きて、或は學校を興し、或は刑法を更定し、或は賦稅を輕減し、專ら意を國治に注ぎしが、子煬帝之を弑して位に即く。（千二百六十四年）煬帝性豪華にして內は盛に土木を興し、外は屢遠征を企てり。

（第一）土木　煬帝は長安を西京とし、洛陽を東都となし、大に其都城、宮殿を營み、又所在に離宮をおきて巡遊に備へ、尋で通濟渠（黃河より淮水に淮る）刊溝（淮水より楊子江に至る）永濟渠（今の衞河にして黃河より天津に至る）江南河（楊子江より杭州に至る今の浙江の運河なり）を開きて、江南と河北との水路を通じ、其他盛に土木を興しゝかば、丁男給せずして、婦女を使役するに至れり。

（第二）外征　當時西域四十餘國の商賈、河西に來りて貿易

煬帝高句麗を伐つて大敗す

せしかば、煬帝は頻に彼等の入朝を促がして、國の富强を誇示し、又南は林邑（今の交趾支那の一部）を伐ちて赤土（今の暹羅の一部）に通じ、東は流求（今の臺灣）を降し、（千二百七十年）西は當時青海附近に蕃殖せし鮮卑の餘裔の吐谷渾を破れり。かくて隋の國威四方に振ひしかば、我國も亦使を派して初めて通交せり。（千二百六十八年）唯高句麗朝貢せざりしかば、煬帝自から將として鴨綠江に至りしも大敗し、（千二百七十二年）尋で大軍を發して遼東を攻めしも、復克たずして還れり。

征伐に土木に、天下其負擔に苦みしが、帝の遼東に大敗するに及んで、叛亂四方に起り、李密は河南を畧せしが、後王世充之を滅ぼして洛陽に據り、竇建德は河北に據り、其他

群雄の割據

唐天下を一統す

の群雄所在に割據せり。李淵も亦其子、李世民と共に、兵を擧げて長安に入り、遂に帝位に即く。（千二百十八年）之を唐の高祖となす。是時煬帝は江都（江蘇省揚州府）に在りて、已に反者に弑せられしかば、高祖は李世民をやり、王世充竇建德以下の群雄を平定して天下を一統し、幾ならずして位を李世民に傳ふ。（千二百十七年）之を太宗といふ。

太宗位に即くに及んで、杜如晦、房玄齡等朝政を統べ、李勣等軍事を掌どりしかば、國威外に揚がり、太平內に興れり。加之唐の諸制度も亦多く此時代に定まり、而して此等の諸制度は、支那歷代の摸範となりしのみならず、我國及朝鮮の制度も亦、之に參酌せし所極めて多ければ、今左

唐代の中央政府の官制

に其大畧を述ぶべし。

(第一)官制　唐の中央政府には、上に三省ありて天下の大政を統べ、其下に六部ありて行政事務を分擔せり。三省とは尚書、門下、中書をいふ。中書省は天子の詔勅を宣奉することを掌り、其長を中書令といふ。門下省は其詔勅を審査することを掌り、其長を侍中といふ。尚書省は中書、門下二省を經て、已に確定せる詔勅を天下に施行することを掌る。其長を尚書令といひ、其副に左、右兩僕射あり。左僕射は吏、戶、禮の三部を統べ、右僕射は兵、刑、工の三部を統ぶ。吏部は官吏の黜陟を掌り、戶部は賦稅の事を、禮部は禮儀の事を、兵部は兵備の事を、刑部は刑罰の事を、工部は百工の事

三省と六部と

地方の官制

を掌る。之を合せて六部といひ、六部の長官を尚書といふ。三尚書は一僕射に隷し、兩僕射は尚書令に副となり、此の如くして天下の行政事務を尚書省に統べたり。今其關係を圖に示さば左の如し。

地方の官制は、天下を十道(關內、河南、河東、河北、山南、隴右、淮南、江南、劍南、嶺南)に分ち、道の下に州あり。州の下に縣あり。縣に令をおき、州に刺史をおき、以て其地方を治めしめ、道毎に巡察使をおきて、州、郡を督察せしめたり。

南北朝の際大に門閥を尚ぶ

(第二)官吏登庸法　上古周の世には鄉舉里選の法ありて、才德ある者は、其鄉里より之を朝廷に選舉して官吏となし、兩漢の時は、天子親しく天下の賢良の士を策問し、其對策の結果に應じて、官職を授くるを常とせしが、尙ほ周代の舊により、盛名天下に聞ゆる者は、對策を用ゐずして官吏に登庸せり。然るに東漢の末、天下の處士虛名を竊む者漸く多かりしかば、三國の時、魏は各地方に中正と稱する官をおき、鄉評に本づきて其地方の人物を次第して九品となさしめ、朝廷は其品第によりて官吏を登庸せしが、其後中正の愛憎漸く甚しく、上品は必ず名門に限り、從うて門閥を尙ぶの風漸く盛となり、天下の人士は徒に勢家と

唐の官吏登庸試驗法

姻親を結ぶことを力めて、遂に學業を顧みざるに至りければ、隋の時、九品中正の官を廢し、新に進士の科を開けり。(千二百六十六年)唐の制度は、大略隋に本づき、京師及地方の學校出身者を生徒といひ、州、縣の試驗に及第せし者を鄉貢といふ。歲每に生徒、鄉貢を尙書省に會して之を考試し、合格者に官を授く。之を進士といふ。爾後多少の損益あれども、支那の官吏登庸法は、大抵此法を慣用せり。而して考試の課目は、主として經義と時務策とに在り。時務策とは時事の得失を論ぜしめ、經義とは五經(易、詩、書、禮、三傳、三)の義理を問ふなり。

抑秦の燒書の後を承けたる兩漢の學者は、專ら古書の註

五經正義

釋に從事せしが、中に就きて鄭玄尤も盛名あり。魏、晋の際、老、莊の學行はれて、學風一變するや、王肅此時に出でゝ新に註解を作り、頗る漢儒の所說と異同あり。王肅の學は主として江南に行はれ、鄭玄の說は江北に布きしが、唐天下を一統するに及び、南北兩派の所說を折衷して、新に五經正義を作り、朝廷の考試は一に之を表式となさしむ。

均田の法

(第三)田制及稅法　唐は均田の法を用ゐ、天下の丁男、年十八以上の者には、官田百畝を給與し、其收穫中より粟二石(我が八斗四升弱)を納めしむ。之を租といふ。又家毎に其土地の物産若干を獻ぜしむ。之を調といふ。其他歲毎に廿日間、人民をして國家の力役に服さしむ。之を庸といふ。故に唐の稅

租庸調

法には租、庸、調の三種あり。租は田稅、調は戶稅、庸は口稅なり。此の如く唐の田制及稅法は、偏に天下戶口の數と關係あるを以て、三年毎に必ず戶籍を改造せり。

五刑と十惡と

(第四)刑法　支那の刑法は隋、唐に至りて尤も完備せり。唐の刑法には凡そ五種あり。笞、杖、徒、流、死是なり。之を五刑といふ。笞(十、廿、卅、四十、五十)杖(六十、七十、八十、九十、百)徒(一年、一年半、二年、二年半、三年)の三刑は、更に五等に分かれ、流刑(二千里、二千五百里、三千里)は三等、死刑(絞、斬)は二等に分かるゝが故に、刑の輕重凡そ廿等あり。皆相當の銅を納れて其罪を贖ふを得れども、十惡(謀反、謀大逆、謀叛、惡不睦、不義)の如き、君、父に對する悖行は、一切贖罪を許さず。これ當時の法律は、一般に重きを德教におきしが故なり。唐以

來今日に至るまで支那の刑法は、殆ど此舊法を慣用せり。

第十五章　唐の外國經畧

太宗死し、(千三百九年)子高宗嗣ぐ。長孫無忌、李勣等遺詔を受けて政を輔け、益國威を輝かせり。太宗の一代及高宗の初年は、實に唐の最盛期にして、唐の國威は遠く中央及南、東二方の亞細亞大陸に普及せり。今左に項を分ちて其外國經略の次第を叙し、併せて當時に於ける亞細亞諸國の狀躰を明にすべし。

(第一)我國及朝鮮との關係　曩に西漢の武帝の時、古朝鮮を平定せしが、西漢の衰ふると共に、當時松花江附近に蕃

高句麗の建國

百濟の建國

新羅の建國

殖せし滿州人種の一部は、部酋朱蒙に率ゐられて南に下り、沸流水(今の佟佳江)の上流地に高句麗國を建設せり。(六百二十四年)其後國威漸く強く、遂に殆ど古朝鮮の故土を占有し、更に南方の經畧に從へり。

朝鮮半島の南部には、曩に三韓鼎立せしが、西漢の末、高句麗の朱蒙の次子、溫祚事を以て國を遁がれ、馬韓に入りて百濟なる一部落を建て、(六百四十三年)次第に勢を得、東晉の初世には、全く馬韓の地を一統せり。是時高句麗は南下して百濟を侵しゝかば、(千二十九年)爾後此二國は永く仇敵となれり。』當時百濟の東南に新羅あり。新羅はもと辰韓の一部落にして、西晉の末世に至り、辰韓、辨韓の諸部落を併呑せしが、

新羅及百濟我が保護國となる

高句麗百濟の同盟と新羅の孤立と

其地最も我國に近くして、屢我九州の叛民を煽動しければ、神功皇后遂に之を征服せり。時に百濟は高句麗の侵略を被りしかば、亦朝貢して我保護を仰げり。是に於て我國は、辨韓の故地に任那府を開きて、新羅、百濟を保護國とせしが、唯高句麗は其勢を負うて我國に服せず。殊に朱蒙十二世の孫なる長壽王立つに及び、(千百七十二年)都を平壤に奠めて頻に百濟を擊破せり。已にして新羅も亦高句麗に通じて百濟を侵略し、又我國に叛きて任那府を陷れたり。(千二百廿二年)我繼體、欽明兩天皇の時、屢新羅を征せしも遂に成功なく、新羅の國勢日に興りしかば、高句麗も遂に其強大を恐れて百濟と黨し、更に我國を連ねて新羅を討滅せんこ

新羅好を隋、唐に通ず

百濟及高句麗の滅亡

とを圖れり。

是時隋已に南、北朝を一統して、外國經略を企てしかば、新羅は頻に好を隋に通じ、隋の煬帝は爲に高句麗を侵擊して大敗せり。隋亡び唐興るに及んで、新羅は新に其保護を乞ふ。是に於て唐の太宗は陸路高句麗を親征して復大敗せしが、(千三百五年)高宗の時、蘇定方をして海軍を率ゐ、新羅と協力して百濟を伐たしむ。我齊明天皇筑紫に幸して百濟に應援せしも唐軍の爲に破られ、百濟遂に滅亡せり。(千三百廿三年)

唐は尋で又高句麗に内亂あるを機として之を滅ぼし、(千三百廿八年)其都城平壤に安東都護府を開きしが、幾ならずして

新羅朝鮮半島を併す

新羅は高句麗の餘衆を使嗾して亂を起さしめ、遂に平壤を陷る。(千三百卅五年)然れども唐は高宗の死後、內亂多くして力を外事に專にする能はざりしかば、安東都護府を遼東に移し、朝鮮半島は新羅の占領に任かせり。

我國と隋唐との交通

百濟、新羅の我國に歸服してより、儒學、佛法の次第に我國に將來せられしのみならず、當時朝鮮に來住せし漢人の我國に歸化する者多かりしかば、我國は彼等を介して支那に通ぜしめ、其紡織、工藝を傳へて大に我國の文化を進めしが、隋、唐の際、支那と朝鮮との關係頻繁を加ふると共に、我國と支那との交通も亦頓に盛大となる。我推古天皇の時、小野妹子をして隋に通ぜしめ、(千二百六十八年)唐興るに及んで歷朝遣唐使をおき、頻に使聘を通じて其文物を將來せり。當時我僧侶、學生の唐に留學する者頗る多く、最澄(傳敎大師)空海(弘法大師)等入唐して佛法を傳へ、吉備眞備、安倍仲麿等入唐して儒學を修めしが、唐の衰ふるや、菅原道實は宇多天皇に奏して遣唐使を止めしより、(千五百五十四年)兩國國際上の交通は、一旦斯に中絕せり。

我國の僧侶學生多く唐に入る

突厥の興起と柔然の滅亡と

(第二)突厥との關係　後魏の太武帝の北征以來、柔然の勢大に衰へしが、皇紀千百七十年の頃、太檀五世の孫なる醜奴、及其弟頭兵相續ぎて柔然の可汗(カン)となるに及んで、大に國勢を恢復し、後魏の東、西に分かれて相攻爭せるに乘じ、屢北邊に入寇せり。已にして當時金山(阿爾泰山)附近を占領し

嚈噠の興亡

突厥東西南部に分かる

て、柔然の一屬部なりし突厥の部長土門は、事を以て柔然に背き、其子木杆可汗の時、遂に柔然を滅ぼして其地を併せ、（千二百十五年）尋で西に向うて嚈噠部を伐つ。

皇紀千五十年の頃、笈多王家中印度の曲女城（今の「カノージ」）に興り、案度羅王家に代りて印度に號令し、又大月氏を北印度より驅逐せり。此の如くして大月氏の衰ふると共に、金山の西邊に散在せし土耳古人種の嚈噠部は、南下して中央亞細亞を占領し、（千百年前後）復笈多王家を破りて北印度を畧し、更に西、波斯に侵入して歳幣を納めしめ、又天山南路の諸國をも羈屬して、國威日に盛なりしが、遂に突厥に滅ぼされ、（千二百廿年頃）突厥の領土は、内、外蒙古より、天山南、北兩路を經て、中央亞細亞に及べり。是に於て木杆可汗は、自から都斤山（杭愛山の附近）に居りて東方を統べ、從弟達頭可汗をして千泉（塔拉斯河の附近）に居りて西方を統べしむ。突厥是より東、西兩部に分かれたり。

東突厥は連歳支那の北邊に入寇して、北周及隋を苦めしが、唐の初め、木杆可汗の曾孫、頡利可汗東突厥を統領するに及んで、暴戾にして且其從子、突利可汗と爭を起しゝかば、部落漸く分裂して國勢振はず。之に乘じて鐵勒諸部も亦離叛せり。

鐵勒部は當時獨樂（今の土拉）河の附近に蔓延せし土耳古人種にして、其部族甚だ多く、就中薛延陀、回紇の二部尤も強し、

東突厥の滅亡と回紇部の興起と

高昌國の滅亡

從來東突厥に臣服せしが、頡利可汗の暴戾を厭ひ、叛きて唐に通ず。太宗は李靖、李勣をやり、之と東突厥を夾擊して、遂に之を滅ぼせり。(千二百九十年)是に於て東突厥の舊土は、概ね鐵勒諸部の占領に歸し、薛延陀部は一時之を統領せしが、幾ならずして回紇部は薛延陀部を斃し、鐵勒諸部を率ゐて唐に歸服せり。(千三百六年)

唐已に東突厥を滅ぼし、更に高昌國(今の吐魯番附近一帶)を伐つ。高昌國は天山の東端に在りて西突厥に臣服し、屢〻西域諸國の唐に來貢せるものを妨げしかば、太宗は侯君集をして之を討滅せしむ。(千三百年)是に於て唐の領土は、直に西突厥と相接するに至れり。

西突厥の滅亡

吐蕃と唐との和戰

西突厥は達頭可汗の孫、統葉護可汗の時、波斯を征服して其保護國となし、國勢益强盛なりしが、其晩年より內亂起り、更に東、西兩部に分かれて相攻爭し、國力大に疲弊せるを機とし、高宗一旦之を征服せしが、(千三百十七年)尋で其餘衆吐蕃に應じて、天山南路を擾しゝかば、高宗は裴行儉をやり、復之を平定せしめたり。(千三百四十年)

(第三)吐蕃及印度との關係　吐蕃は即ち圖伯特なり。其國山岳多くして、古來支那と交通せざりしが、棄宗弄贊其國王となるに及んで(千二百九十年前後)英畧あり。內は大に佛法を奬め、外は頻に領土を擴め、遂に黨項、吐谷渾の二部を青海附近に擊つ。二部共に唐の保護を仰ぎしかば、斯に唐と吐蕃

超日王と戒日王と

との爭起り、互に勝敗ありしが、吐蕃遂に和を唐に請へり。（千三百一年）吐蕃の南境は、泥婆羅を經て、中印度に通ずるが故に、唐と印度との交通も亦、是より頻繁を加へたり。

印度は皇紀千百八九十年の頃、中印度、烏仗那に超日王興り、漸く嚈噠種族を國外に攘ひ、遂に西、北、中、三印度を一統して、大に文學を奬勵せしが、其後千二百七八十年の頃、戒日王は曲女城に據りて殆ど全印度に號令し、亦大に文學を奬め、且佛法を興しゝかば、詩人、學者、高僧多く其朝に集り、印度の近世文學は、此間に在りて尤も發達せり。

戒日王は唐の太宗と時を同くせしが、太宗已に東突厥を滅ぼし、吐蕃を服し、唐の威勢四隣に振ふに及んで、始めて

印度の諸侯唐に通ず

「ラヂャプト」種族の興起

佛教衰へ溫都教起る

使を唐に通ぜしかば、（千三百一年）太宗も亦王玄策をやり其國に使せしむ。（千三百八年）時に戒日王正に死し、權臣阿羅那順自立して王玄策を拒む。王玄策は吐蕃、泥婆羅の兵を募りて之を擒にせしより、印度の諸侯等大に恐れ、前後唐に朝貢せり。

戒日王の後、諸侯復各方に割據して相攻爭する間に、ラヂャプト種族西印度より崛起せり。此種族はもと大月氏、嚈噠等の外來人種と、印度阿利安人種との間に生ぜし雜種にして、次第に其勢力を增進せしが、當時印度には文學の再興と共に、古典の研究盛となり、從うて波羅門教徒は愈其勢を恢復し、遂に波羅門教を改良して溫都教を興こし、頻

大食國の興起と波斯の滅亡と

に佛教を排撃せしかば、ラザブト種族は溫都教を崇奉して其歡心を買ひ、此の如くして皇紀千四百年乃至千六百年の間に、ラザブト種族は印度西半部の覇權を握り、溫都教は佛教に代りて印度の國教となれり。

（第四）中央亞細亞との關係　東漢の末、安息國の衰微せるに乘じ、波斯人アルタクセルクゼス之を滅ぼして波斯國を再興し、（八百八十六年）國勢日に强大となる。後一時嚈噠又は西突厥の侵畧に苦しみしも、よく國命を維持せしが、大食（とも）「シリア」地方の阿剌比人を指せしが後「サラセン」帝國をも云へり）の侵擊を受くるに及んで、國王卑路斯連に敗れ、唐の保護を仰ぎしも、其地は遂に摩訶末教徒に占領せられて、波斯は斯に滅亡せり。

12170
66
613

大食國唐に通ず

大食國の極盛

摩訶末教の祖師摩訶末は、皇紀千二百七十年の頃始めて一新教を唱へ、宗教の勢を借り、阿剌比亞を統一して所謂大食國を興せしが、其後嗣よく遺志を紹ぎて新宗教の擴張に從事し、哈利發（教皇の繼嗣をいふ）オスマンの時、遂に波斯を併呑せり。大食固より唐の威名を聞き、其波斯を保護せんことを恐れしかば、オスマン以來頻に好を通じて其歡心を買ひしが、高宗の後、唐の衰微せしを機として天山南路を侵し、（千三百七十年）又印度にラザブト種族と印度阿利安人種と相爭ひ、佛教徒と溫都教徒と相爭ふに乘じて、印度河沿岸の地を畧せり。（千三百一年）

要するに皇紀千三百年代の後半は、大食の極盛期にして、

葱嶺以西の地は全く其占領に歸し、此新領土の住民は皆摩訶末教に改宗せしより、中央亞細亞に於ける佛教先づ衰へ、天山南路の佛教も亦漸く其勢を失ふに至れり。

南海諸國唐に朝貢す

第十六章　唐の極盛

太宗高宗の世、唐は主として其力を東、北、西の三面に用ゐ、南方を經營せざりしも、其國威加はるに從ひ、占婆（交趾支那附近）眞臘（今の東蒲寨）扶南（今の暹羅）闍婆（爪哇）室利佛逝（今の蘇馬塔拉の一部）等の南海諸國皆來貢せしかば、唐の政令の及ぶ所、東は朝鮮、滿州より、北は內、外蒙古を併せ、西は天山南、北兩路より、中央亞細亞を包み、南は後印度諸國を羈屬せり。唐は此廣大なる

六都護府

領土を治めんが爲に、塞外に六都護府を建て、其下に都督府と州とをおけり。州に刺史あり。都督府に都督あり。刺史と都督とは多く在來の部長、族酋を之に任じ都護は特に朝廷より派遣せられて、所部の刺史、都督を統ぶ。六都護府の所在及所轄區域は左の如し。

都護府	所在地	所轄區域
1 安東	初め朝鮮の平壤に治し後、遼東城に移る	滿州及朝鮮
2 安北	初め都斤山の南に治し後、陰山の麓に移る	外蒙古
3 單于	山西省大同府の西北なる雲中城に治す	內蒙古
4 北庭	天山北路の庭州に治す今の廸化府なり	天山北路
5 安西	天山南路の龜茲に治す今の庫車なり	天山南路及中央亞細亞
6 安南	嶺南の交州に治す今の東京の河內なり	南海諸國

唐は空前の一大帝國を建設せしが故に、從うて當時海、陸

陸路東西の交通

兩路に於ける東西兩洋の交通も亦、頗る頻繁を加へたり。』

(第一)陸路　隋の時より河西の地は、東西交易の中心となり、西域諸國の商人多く其地に來集せしが、唐興りて中央亞細亞、天山南路の通路開くると共に、西域の商人の來集愈增加し、漢人にして波斯、印度地方に通商せし者も亦尠からず。殊に大食國の勢を得るや、阿剌比人は次第に其通商の範圍を擴め、陸路殊に海路に於て、當時の世界の商權を掌握せり。

海路の交通

(第二)海路　兩漢、三國時代に、羅馬の商船は印度洋の航海權を專有せしが、佛教の東漸して、支那と南洋との通路開くるに從ひ、支那の海運漸く興り、隋、唐の初世に至りて、支

阿剌比人支那に通商す

那の商船は、南洋、錫嵩を經、遠く波斯灣内に入りて交易に從事せり。其後大食國興り、波斯灣内及印度河口の諸港を占領するに及んで、阿剌比人は次第に其航路を擴張し、遂に漢人に代りて印度洋の航海權を占め、皇紀千三百五十年以後は、彼等の南洋を經て、廣州(廣東省)泉州(福建省)杭州(浙江省)の諸港に通商する者頗る多く、唐は此等の諸港に、提擧市舶なる官をおき、海關稅を徵收して、歲入の一大稅源となせり。

要するに唐代二百五十年間は、陸路殊に海路に於て、東西兩洋の交通頗る盛大を極めしが、其後大食の國勢振はず、支那も亦内亂多く、此等内、外の事情の爲め、次第に衰微を

祆教即拜火教

免れざるに至れり。

東西の交通盛大となるに從ひ、當時中央亞細亞に流行せし諸宗教は、前後支那に將來せられたり。

(第一)祆教　祆教は太古バクトリアの蘇魯支が創唱せし蘇魯支教なり。其教たる火を神聖視するが故に、之を拜火教といひ、又太陽を拜するが故に祆教(祭天を祆といふ)ともいふ。夙に波斯の國教となりしが、波斯滅亡の時、祆教徒は摩訶末教徒に虐待せられて東方に移住し、其教漸く唐に流傳せり。

摩尼教と回紇人と

(第二)摩尼教　摩尼教は皇紀八百八十年の頃、波斯人摩尼の創唱に係り、夙に回紇人の歸依を得しが、唐の中世以後回紇人多く塞内に移住せしかば、其教又多少支那内地人に流行せり。

阿羅本景教を傳ふ

(第三)景教　景教(景は光輝の義其教義の光輝發揚の謂なり)は皇紀千百年の頃、ネストリウスの創唱せし耶蘇教の一新派にして、波斯、中央亞細亞に流行せしが、唐の太宗の時、波斯人阿羅本其經典を將來せしより、(千二百九十八年)漸く支那に流行し、太宗、玄宗等も亦之を尊信して、爲に其寺院の建設を奬勵せり。

回教

(第四)回教　回教は摩訶末教なり。後世回紇人の崇奉する所となりしが故に回教といふ。大食國の勢を得ると共に、天山南路を經て、支那に將來せられたり。

佛教の隆盛

(第五)佛教　漢代に東漸せし佛教は、此等諸外教の傳來に

よりて、毫も其勢力を失はざるのみならず、魏、晉、南北朝を經、唐に至りて實に其隆盛を極めたり。其主要なる原因は左の如し。

(1)東晉以來、印度及中央亞細亞地方の佛教徒は、海、陸兩路より支那に來り、布教又は譯經に其身を委ねて、大に佛教の傳播を圖れり。

(2)東晉以來、支那の各君主は、概ね佛法に歸依して、之を民間に流布するに盡力せり。

(3)佛教の流行すると共に、支那の僧侶も亦多く印度に往きて佛典を將來し、益佛教の發達を促せり。就中法顯は皇紀千五十九年(東晉の末)印度に往き、錫嵩より南洋を經て支那に歸り、其間十二年を費し、玄奘は皇紀千二百八十九年(唐の太宗の世)印度に向ひ、百餘國を歷遊し其間十七年を經たり。尋で義淨は皇紀千三百卅一年(唐の高宗の世)南洋より印度に航し、廿五年の後歸國せり。

曩に百濟は佛法を東晉より傳へ、(千四百四十年)尋で之を我國に傳へしが、(千二百二年)我國と唐との交通頻繁を加ふるに從ひ、我國の佛教も亦隆盛を極めたり。

第十七章　唐の中世

高宗の位に即くや、太宗の宮女武氏を納れ、遂に立てゝ皇后となせしが、晩年多疾の故を以て、國政を武后に委ねし

武后大權を握る

則天武后

より、大權其手に歸し、高宗の死（千三百四年）後、其後嗣を廢して自から皇帝の位に即き、國號を周と改む。所謂則天武后是なり。然れども內行修らずして朝政大に紊れしかば、張柬之は武后を强迫し、高宗の子、中宗を位に即かしめて唐室を復興せり。（千三百六年）已にして皇后韋氏中宗を弑して、自から政權を握りしかば、中宗の從子隆基は韋氏を誅し、父睿宗を迎へて位に即かしめ、尋で其禪を受く。（千三百七年）之を玄宗となす。

高宗以來內亂相繼き、唐の國勢の衰へたるに乘じ、大食、回紇、吐蕃等屢邊境を擾しゝかば、玄宗位に即くに及んで、國境の要地に左の十節度使（河西の節度使のみは高宗の時より置けり）をおき、兵馬の大權を委ねて四方を經畧せしめしより、唐の國威復塞外に張れり。

十節度使

節度使	所在地	防禦方面	節度使	所在地	防禦方面
1 平盧	（內蒙古土默特）	靺鞨諸部	6 隴右	（甘肅省西寧府）	吐蕃
2 范陽	（今の北京）	契丹	7 安西	（天山南路の庫車）	西域諸國
3 河東	（山西省太原府）	回紇	8 北庭	（天山北路の迪化府）	
4 朔方	（甘肅省靈州府）		9 劍南	（四川省成都府）	吐蕃及南詔
5 河西	（甘肅省涼州府）	回紇及吐蕃	嶺南	（廣東省廣州府）	南海諸國

道教の由來

玄宗又文學を奬勵し、道教を尊崇す。道教は東漢、三國の際、佛教興隆の影響を受けて、支那に起源せし一種の宗教に

武宗諸外教を抑壓す

して、老子を以て其祖師となし、其教を傳ふる者を道士といふ。唐の興るや、其姓の李なるを以て、老子を仰ぎて祖先となし、頗る道教を尊崇せしが、玄宗の時遂に之を唐の正教と定めしより、其流行益盛大となり、玄宗七世の孫、武宗に至り、一時道教以外の諸宗教を嚴禁せしかば、(千五百五年)唐初傳來の諸外教は、概ね衰滅に歸せり。

已にして玄宗在位日久しく、漸く宴樂を好み、國政やゝ亂る。安祿山之を機とし、帝の貴妃楊氏に結んで頻に帝の信任を得、初め平盧の節度使となり、尋で范陽、河東の二節度使を兼ね、其兵力を負うて遂に反を謀り、河北を陷れ、洛陽をとり、更に長安を犯す。(千四百十五年)玄宗は蜀に出奔し、太子は

安祿山の反亂

回紇部の極盛

靈武(甘肅省靈州府)に遁れて帝位に即く。之を肅宗となす。安祿山も亦帝を洛陽に稱せしが、幾ならずして子安慶緒に殺され、內亂起りしかば、官軍之に乘じ、回紇等の援兵を得て、屢賊軍を破ぶり、肅宗の子代宗の時、始めて反亂を平定するを得たり。(千四百廿三年)

唐は安祿山の亂後國威全く萎微し、之に乘じて回紇、吐蕃、南詔の諸國頻年邊境を侵畧せり。

(第一)回紇との關係　薛延陀部滅亡の後、回紇部は全く外蒙古一帶の地を占領し、殊に斐羅(フイロ)其可汗となるに及んで(千四百三年)大に領土を擴め、國威益强盛なりしが斐羅の子葛勒可汗の時、安祿山の亂を救うて功ありければ、肅宗は其

黠戛斯部の興起

皇女を之に妻はせ、且厚く歳幣を遺りしより、回紇の國風漸く奢侈、遊惰となる。之に乗じて吐蕃は其南を攻め、仙娥河附近の黠戛斯部も亦其北を侵しゝかば、回紇部遂に分崩し、其餘衆天山南路に走り、若くは河西に遁れ、黠戛斯部代りて其地を占領せり。(千五百年)

吐蕃大に唐を侵略す

(第二)吐蕃との關係　棄宗弄賛曩に唐と和してより、西邊久しく無事なりしが、高宗の時、吐蕃復吐谷渾の地に侵入せしより、(千三百廿三年)唐との和議破ぶれ、吐蕃は頻に天山南路及青海の地を略せしが、安祿山の亂後は更に河西、隴西を奪ひ、時に或は唐都長安を陷れたり。(千四百廿三年)已にして雲南の南詔部叛きて唐に通ぜしより、吐蕃の國力漸く衰へ、遂

吐蕃の衰微

に和を唐に請ひ、和盟の碑を國都邏娑に建てたり。(千四百八十二年)

(第三)南詔との關係　唐初雲南の蠻族六部に分かれしが、南詔部(詔は蠻語王の義なり。故に南詔とは南王と云はんが如し。六部の最南に在るを以てなり。)最も強く、遂に他の五部を一統し、(千三百九十八年)安祿山の亂後は、吐蕃に從うて屢〻四川に侵入せり。已にして吐蕃の專横を怨んで背き去り、反つて其地を攻略せり。酋龍南詔王となるに及んで、(千五百十九年)國を大理と號し、唐の安南都護府を陷れ、其領土一時交趾より東印度に跨りしが、酋龍の死後國勢漸く振はず、遂に和を唐に請へり。(千五百卅七年)

大理國安南を陷る

第十八章　唐の衰滅

玄宗の時邊要の地に節度使をおきしが、安祿山の亂後內地久しく安からず、邊陲も亦屢〻回紇、吐蕃の侵入を被りしかば、節度使は次第に增加し、遂に遍く天下に布くに至れり。節度使はもと其管內に於ける兵、政の兩全權を掌握せしが故に、其勢威日に强く、漸く世襲の姿をなして朝廷の命令を奉せず。就中其專橫を極めしは河北の三鎭なり。

節度使の跋扈

河北の三鎭

安祿山の反亂平定するや、代宗は無事を冀ひ、賊の降將三人を擧げて、成德（直隸省正定府）魏博（直隸省大名府）盧龍（直隸省永平府）三鎭の節度使となしゝが、（千四百廿三年）幾ならずして三鎭相結託して兵を募り、城を固くし、遂に賦稅を納めず。代宗制する能はず。代宗の子德宗は賢臣李泌、陸贄等に任じ、德宗の孫憲宗は名將武元衡、裴度を用ゐて、一時三鎭を制服せしことありしも、憲宗尋で宦者の爲に弑する所となりしより、（千四百八十年）三鎭を始め、諸方の藩鎭復朝廷に離叛せり。

宦者專權の由來

藩鎭外に離叛すると共に、宦者は內に跋扈して、益〻唐室の衰頽を促せり。曩に玄宗宴樂に耽りしより、宦者漸く勢を得、尋で肅宗、代宗の時、內亂、外寇多く、宦者常に其左右に侍して君主の信任を得、次第に機務に預りしより、權勢頓に重く、遂に外將、內相は勿論、天子の廢立も亦全く其手に歸するに至れり。

朱全忠宦者を殲くす

唐の滅亡

憲宗の後七十年の間に、帝位を踐みし者凡そ八人、皆宦者の擁立する所なり。憲宗の曾孫昭宗位に卽くに及んで（千五百四十九年）英氣あり。汴（河南省開封府）の節度使朱全忠を招きて、悉く宦者を誅戮せり。（千五百六十三年）然れども朱全忠是より權勢を專らにし、帝を弑して遂に唐を簒ふ。（千五百六十七年）之を後梁の太祖となす。唐は天下を保つこと二百九十年にして亡べり。

宦者權を內に弄して以來、諸方の節度使は殆ど獨立の姿をなさゝしが、朱全忠唐を簒ふに及んで、彼等も亦王を一方に稱せり。就中其强大なる者左の如し。

王名	都城	王名	都城
北 燕王劉守光	幽州（今の北京）	南 吳王楊行密	楊州（江蘇省楊州府）
晉王李克用	晉陽（山西省太原府）	吳越王錢鏐	杭州（浙江省杭州府）
西 岐王李茂貞	鳳翔（陝西省鳳翔府）	閩王王審知	建州（福建省建寧府）
蜀王王建	成都（四川省成都府）	楚王馬殷	潭州（湖南省長沙府）
		南漢王劉䶮	廣州（廣東省廣州府）

群雄の割據

彼等は後梁の太祖と相攻爭して、支那內地は方に紛擾を極め、加之塞外の吐蕃、回紇等、已に皆衰微せしかば、契丹は此機に乘じて、東亞の一大强國となれり。

第三編　近古期　蒙古族最盛時代

（千五百六十七年乃至二千二百七十六年）

第一章　契丹の興隆及五代の紛亂

耶律阿保機契丹を統一して皇帝を稱す

契丹は滿州人種の一派にして、南北朝の頃より、潢河（内蒙古の西剌木倫）附近を根據として、支那に歸服せしが、唐の衰ふるや、漸く内蒙古東部一帶の地を占領して、遂に獨立の姿をなせり。其國もと八部に分かれ、各大人を戴き、八部の大人は三年毎に交代して全八部を統領せしが、耶律阿保機契丹を統領するに及び、（千五百六十七年）諸部の大人を殺し、交代の制を廢して皇帝を稱せり。（千五百七十六年）之を契丹の太祖となす。

契丹の太祖四隣を征す

太祖已に國内を一統しければ、斯に四隣の征伐に從ひ、先づ西に向ひ黠戛斯部と回紇部とを擊破して、蒙古西部一帶の地を畧し、又青海附近に吐谷渾、黨項の諸部を降し、遂に東に還りて渤海國を擊つ。

粟末靺鞨部と黑水靺鞨部と

滿州人種の一派に靺鞨部あり。東晉の頃より滿州地方に散在して數十部に分かれ、就中黑水、粟末の二部尤も强し。黑水靺鞨部は黑水（黑龍江）附近を、粟末靺鞨部は其南粟末水（松花江）附近を占領せしが、大祚榮、粟末靺鞨の部長となるに及んで、始めて國號を建てゝ渤海といふ。（千三百七十三年）爾後國勢日に强く、黑水以下の諸靺鞨部を服して、隱然東方の一强國たりしが、契丹の太祖は其國都忽汗城（吉林省寧古塔附近）を陷

渤海國の興亡

後梁亡び後唐興る

れて之を滅ぼせり。(千五百八十六年)太祖死し子太宗嗣ぐ。是時契丹の領土東は日本海より、西は天山の麓に達せしかは、今や南下して支那内地を侵畧せんことを圖れり。

後梁の太祖朱全忠已に唐を簒うて、帝位に大梁(即ち汴、今の河南省開封府)に即き、燕王劉守光と連和して、頻に晉を侵しゝが、李克用の子李存勗勇畧に富み、先づ燕を降し、尋で後梁を滅ぼして帝位に洛陽に即く。(千五百八十三年)之を後唐の莊宗となす。莊宗又岐を降し、蜀を併せ、一時殆ど江北を統一するの勢ありしが、是より意滿ちて宴樂に耽りしかば、將士離叛し、王族李嗣源を擁して位に即かしむ。之を明宗となす。(千五百八十六年)孟知祥なる者、此内亂に乘じ、復成都に據りて後蜀王と稱せり。

後唐亡び後晉興る

明宗の養子李從珂立つに及んで、河東の鎮將石敬塘を忌み、之を殺さんとせしが、石敬塘は契丹の太宗の後援を請ひ、後唐を滅ぼして帝位に即く。之を後晉の高祖となす。(千五百九十六年)高祖は支那北邊の十六州を割きて契丹に謝し、且諸事之が臣下の禮を執りしが、高祖の從子出帝の時、屢禮を契丹に失ひしかば、太宗は大擧南下して後晉を滅ぼし、大梁に據りて國を遼と號せり。(千六百七年)然れども漢人服せず。叛亂四方に起りければ、太宗は守兵を留めて、一旦國都臨潢(西剌木倫の上流)に還りしが、途にして死せり。

契丹の太宗後晉を滅ぼす

遼の太宗の北歸するや、後晉の故將劉知遠は其守兵を攘

うて、帝位に大梁に即く。之を後漢の高祖といふ。其子隱帝の時に至り、鄴の鎭將郭威反し、遂に帝位を簒ふ。之を後周の太祖といふ。(千一六百一年)是に於て隱帝の叔父劉崇は太原に據りて、北漢國を建て、援を遼に乞ひ、頻に恢復を圖りしが、反つて太祖の養子世宗の爲に擊破せられたり。世宗此勢に乘じて江南の經畧に從ふ。

唐の末年楊行密は、今の江蘇、安徽、江西の地を占領して吳王と稱せしが、已にして其部將李昪反き、吳を滅ぼして南唐國を金陵(江蘇省江寧府)に建て、(千九百五十七年)其子李璟の時、更に南閩を滅ぼし、西、楚を併せて、勢威江南を傾けしが、是に至りて世宗の破ぶる所となり、悉く江北の地を割きて和を請

へり。(千六百十八年)世宗北に還りて遼の征伐に從ひしが、中途にして死し、嗣子尙ほ幼なりしかば、將士等趙匡胤を擁立して帝位に即かしむ。之を宋の太祖といふ。(千六百二十年)唐の滅亡より是に至るまで五十餘年、其間中原を占領せしもの、後梁、後唐、後晉、後漢、後周の五國あり。故に史家之を五代といふ。宋後周に代るに及んで、四方の列國前後討滅せられ、天下復一統に歸せり。

第二章　宋の一統

唐末以來、節度使は其藩鎭に於ける兵、政の二大權を握りしが、五代の時、天子は概ね其部下の將士の擁立に係り、從

宋の太祖節度使の權威を削奪す

宋の太祖の經略北を後にし南を先にす

うて其威嚴重からざれば、節度使は益跋扈を極めたり。宋の太祖は此宿弊を一掃せんが爲に、左の方法を行へり。

(第一)宿將、功臣に諭して節度使をやめしめ、新に文臣を以て之を補欠せしかば、節度使の兵權漸く弱し。

(第二)從來節度使の配下なりし州郡は、更めて朝廷に直隷せしめしかば、節度使は次第に民治の權を失へり。

(第三)朝廷より新に轉運使を各地方におきて、其地方の租稅を管理せしめしかば、節度使は全く財政の權を失ふ。

太祖已に民治、兵馬、財政の三大權を朝廷に收めて、國内の革新を終へたれば、斯に列國の征伐に從ふ。當時列國の宋に服せざる者、北に北漢ありしも、遼の後援ありて、一朝に

宋天下を一統す

太宗瞿越を代つ

征服し難ければ、姑く之を措きて南に向ひ、先づ荆南を降す。(千六百廿三年)荆南は五代の初め、高季興の建國に係り、湖北の一部を占領せしが、是に至りて亡ぶ。太祖更に後蜀を併せ、(千六百廿五年)尋で南漢、南唐を滅ぼしゝが、弟太宗其後を承け、吳越を降し、又北漢を滅ぼして、遂に天下を一統せり。(千六百卅九年)宋の太宗已に支那本部を一統し、又國境を擴めんことを圖りしかば、南北兩方面に於て交趾及遼との關係起れり。

(第一)交趾との關係　交趾は唐の安南都護府の所在地なりしを以て、又安南の名あり。秦、漢以來常に支那に隷屬せしが、五代の時、南漢の衰滅するや、丁部領なる者其地に獨

立して國號を瞿越と稱す。(千六百廿八年)已にして其國內亂ありしかば、太宗は之に乘じて南伐の師を起しゝも、(千六百四十年)炎熱の爲め功なくして還り、交趾は是より全然一外國となれり。

契丹の耶律休哥

(第二)遼との關係　太宗の北漢を滅ぼすや、勢に乘じて遼を侵しゝが、遼將耶律休哥大に宋軍を高梁河(今の北京の西)に破れり。爾後廿餘年間、宋、遼二國の好全く絕え、河北の地は常に交戰の區となる。太宗は一時高麗と連和して、遼の夾擊を志しゝも成功せず。太宗死し、子眞宗嗣ぐに及んで、(千六百五十七年)遼は大擧して宋を侵す。眞宗之を澶州(直隸省大名府)に破ぶりしが、其入寇頻年なるを恐れ、遂に歲幣銀十一万兩、絹廿

澶州の役

新羅の滅亡と高麗の興起と

万匹を遼に贈りて和を結べり。(千六百六十四年)

第三章　遼の極盛及西夏の興起

遼は太宗の後五傳して、其從曾孫聖宗位に即く。(千六百四十二年)賢明にして英畧あり。已に南宋と和し、更に東高麗を伐つ。

曩に新羅は一時朝鮮を統一せしが、唐末に至り、國威の振はざるに乘じて群雄四方に起り、王建なる者松嶽(京畿道開城府)に據りて國を高麗と號し、遂に群雄を平定し、新羅に代りて朝鮮を一統せり。(千五百九十六年)之を高麗の太祖となす。遼と宋との爭起るに及んで、高麗は常に宋と通ぜしを以て、聖

高麗と遼との關係

聖宗時代に於ける遼の領土

宗怒り、高麗に入寇すること前後廿餘年、高麗は頻に援を宋に請ひしも、應ぜざりしかば、遂に貢を納れて臣を稱せり。(千六百七十九年)

是時に當りて遼の領土、東は日本海に莅み、西は天山に接し、南は支那本部の北部を併せ、北は外蒙古を包み、國中凡べて五京あり。臨漢を上京とし、遼陽を東京とし、大定(内蒙古喀喇沁右翼の南)を中京とし、今の北京を南京とし、後又山西の大同を西京となせり。其貢を納れ臣を稱する者、高麗、吐蕃、黠戛斯等六十國、遼は實に東方亞細亞に於ける最强國なりしが、聖宗死して(千六百九十一年)國威漸く衰微せり。

唐の中世、黨項部は吐蕃の攻畧に遭ひ、其一部夏州(鄂爾多斯の南部)に移住し、後漸く蕃殖して常に宋と遼とに臣屬せしが、

西夏の李元昊

西夏と宋との關係

宋と西夏との媾和

李元昊其部長となるに及んで、(千六百九十二年)漸く獨立の姿をなし、先づ回紇部の餘衆の河西に在る者を服從して其地を併せ、都を興慶(甘肅省寧夏府)に奠め、國を西夏と號す。(千六百九十八年)

宋が遼との交戰に疲弊せるに乘じ、頻に其西邊を侵す。時に眞宗の子、仁宗宋に君たりしが、之を防ぎて互に勝敗あり。

遼の聖宗の子、興宗は宋の西夏と難あるを機とし、兵を南京に聚めて南下の勢を示しゝかば、仁宗は歲幣銀帛各十万を增して、僅に其入寇を避け、尋で又西夏に銀帛併せて廿五万兩匹を與へて、宋の封冊を受けしむ。(千七百三年)是に於

て宋の邊境暫く事なきを得たり。

第四章　宋の制度改革

宋は唐末、五代に於ける藩鎮の跋扈に懲り、建國以來其宿弊を除くに急にして、遂に之が爲に其國力を弱くし、太宗先づ交趾に失敗し、眞宗次に遼に失敗し、仁宗も亦西夏に失敗せり。仁宗の後二傳して、神宗位に即くに及んで、（七百廿七年）年若くして氣鋭なりければ、此屈辱を濯がんと欲し、王安石を登庸して、富國、强兵の策を講ぜしむ。王安石主として左の新法を行ふ。

宋の大屈辱

神宗王安石を登庸す

王安石の富國策と强兵策と

新法
- 富國策
  - (1) 青苗法（挿苗の時期に、朝廷より資金を百姓に貸與し、秋熟の時期に、二割若くば三割の利子を添へて還附せしむ。）
  - (2) 募役法（人民に相當の免税を納めしめて、服役の義務をとき、朝廷は別に無職の民を募りて役に充つ。）
  - (3) 市易法（京師に市易務なる官省をおき、市場に賣れざる商品を購買し、若くは官物と交換し、又商人に資金を貸附し、規定の利子を納めしむ。）
- 强兵策
  - (1) 保甲法（一種の民兵制度にして、十家を保とし、五百家を都保とし、都保に正副長二人をおき、部下の保丁をして武藝を講習せしむ。）
  - (2) 保馬法（保丁に官馬を貸與し、其死病する時は、相當の辨償をなさしむ。）

神宗已に王安石を擧けて、內に富國、强兵の策を建てたれば、今や外國の經畧に從ひ、斯に復西夏及交趾との關係起れり。

（第一）交趾との關係　是より先き交趾には、瞿越既に亡び、

宋大越を伐つ

豪族李公蘊なる者大越國を興しゝが、(千七百六十年)神宗は當時大越が、其隣國占城(今の交趾支那)眞臘(今の東蒲塞)との交戰に疲弊せるを機とし、占城眞臘と同盟して之を擊破せしも(千七百卅六年)宋軍の死亡せし者も亦過半にして、遂に國威を南方に張る能はず。

王韶の西方經略

(第二)西夏との關係　仁宗の後、宋の西夏と事なきこと廿年に餘りしが、神宗位に即くに及んで、宋軍西夏を襲ひしより、兩國の和親破れ、神宗は王韶をやり、吐蕃諸部を征服して、西夏の外援を絶たしめしも、兵士の死亡多くして成功なきのみならず、反つて西夏の爲に大敗せしかば、遂に復和を媾せり。(千七百四十三年)

神宗の外國經略の失敗

新舊法兩黨の軋轢

初め神宗西夏を滅ぼし、交趾を降たし、而して後力を遼に專にして、北邊を恢復せんと志しゝが、皆意の如くならざりしのみならず、遼は宋の西夏と難あるを機とし、反つて其北邊を侵畧せり。かくて神宗の政策は外國經畧に於て全く失敗し、加之國内に於ける黨爭の基を開けり。元來王安石の新法は、國庫の充實を目的とせしが故に、人民一般に之を悅ばず、殊に當時の名臣司馬光等は、其祖宗の制に違ふを非難して之に反對し、遂に朝廷に新法舊法の兩黨派を生じて、相軋轢するに至れり。

神宗死し、(千七百四十五年)子哲宗、徽宗相嗣ぎて立つ。此間兩黨政權を爭奪するもの十六年に餘りしが、徽宗位に即き、奢侈

徽宗蔡京を用ゐて新法を行ふ

にして土木を好み、國用給せざるに及んで、新法黨の酋領蔡京を擧げ、新法を復して國庫を充實せしむ。(千七百六十一年)舊法黨是に於て全く敗れたり。

蔡京は邊功を建てゝ、其信任を厚くせんと欲し、童貫をやり、吐蕃を伐ちて河湟(黄河と湟水の間)の地を取り、又西夏を畧ぜしむ。童貫是より權勢を得、遂に女眞部と連合して、遼を夾擊するの策を説く、徽宗是に於て使を發し、海路より女眞に通ぜしむ。(千七百八十年)

宋女眞と遼を夾擊せんとす

第五章　女眞の興隆

女眞は即ち黑水靺鞨部なり。もと渤海に歸服せしが、遼の

生女眞部と熟女眞部と

生女眞部の阿骨打遼に反く

渤海を滅ぼすに當りて、混同江(今の花江)附近の女眞は、遼に臣服して熟女眞部といひ、其東按出虎(今の拉楚喀)水附近の女眞は、唯其羈縻を受け、之を生女眞部といふ。阿骨打生女眞の部長となるに及んで、(千七百十三年)遼の衰微せるに乘じ、兵を擧げて屢遼兵を破ぶり、遂に國を金と號し、皇帝を稱す。(千七百十五年)之を金の太祖となす。

時に興宗の曾孫、天祚帝遼に君たりしが、淫虐にして國政を顧みず。金反するに及んで、親征して混同江に至りしが、金の太祖は逆擊して之を破ぶり、熟女眞部を降だし、遼の東京を陷れて上京に逼る。是時宋使金に來りて、遼を夾擊

宋と金との同盟

せんことを約す。其條件左の如し。

(第一)金は北より遼の中京を攻むると同時に、宋は南より遼の南京を取りて之を夾擊すべし。

(第二)成功の日は、後晉の時、遼に與へし支那本部の地は宋に歸し、自餘の遼地は悉く金の有となす。

(第三)宋は從來遼に與へし歲幣を金に贈るべし。

遼の滅亡

是に於て太祖は遼の上京、中京を降だし、天祚帝を追うて又西京を陷る。遼の王族に耶律大石あり。餘衆を率ゐて西、中央亞細亞に遁がれ、天祚帝は西夏に依らんとせしが、西夏反つて藩を金に稱せしかば、途にして金軍の獲る所となる。遼は建國より二百十年にして亡べり。(千七百八十五年)

金の太宗宋を侵す

是より先き宋將童貫は約に從ひ、遼の南京を攻めて拔く能はざる間に、金軍南下して之を占領せしかば、宋は既定の歲幣の外、每歲代稅錢百万緡を贈るを約し、僅に南京と其附近の六州とを得たり。(千七百八十二年)然れども金もと河北を併呑するの志ありければ、太祖の弟太宗繼ぐに及んで、(千七百八十三年)粘没喝、斡離不等をして、大擧して燕京(遼の南京)を陷れ、直に宋の國都汴京に逼らしむ。

金汴京を陷れて宋の二帝を擒にす

宋の徽宗大に驚き、急に已を罪するの詔を下し、位を其子欽宗に傳ふ。欽宗は金に金廿万兩、銀四百万兩を與へ、且中山(直隸省定州)太原(山西省太原府)河間(直隸省河間府)の三鎭の地を割くを約して其撤兵を請へり。已にして宋は約に背きて三鎭の地

を與へざりしかば、金軍復南下して遂に汴京を陷れ、欽宗、徽宗及其皇妃、皇族を執へて北に還る（千七百八十七年）是に於て河東、河北の全土は悉く金の有に歸せり。

金軍北に去るに及んで、欽宗の弟康王構は位に汴京に即く。之を高宗となす。高宗即位の初め、名將李綱を任用して、鋭意恢復を志しゝが、幾ならずして之を罷め、寵臣黄潛善の言に從ひ、金を避けて都を南、楊州（江蘇省楊州府）に移せり。（千七百八十七年）之を宋の南渡といふ。宋一たび南してより、河南、關中、江淮の地、相繼きて金の有に歸し、遂に恢復の望なきに至れり。

第六章　金宋の攻戰

金の太宗は、宋の南渡を機とし、粘没喝、兀朮等をして南伐せしむ。金軍復汴京を陷れ、長驅して楊州に至る。高宗は難を杭州より溫州（浙江省溫州府）に避けしかば、河南、江淮の地は皆金に没せり。加之宋の南渡してより、西夏は宋に背き、金と同盟して南、關中の地を畧せり。已にして太宗疾篤く、金軍引き還りしを以て、高宗も亦杭州に還りて、都を斯に奠めたり。（千七百九十四年）

曩に高宗の生母韋氏は、徽宗と共に擒となり、移されて遼東に在り。高宗日夜之を召還せんことを念ひ、南渡以來連

捷懶と秦檜と

に使を金にやり、臣と稱して兵を罷めんことを請ひしが、太宗死し、從孫熙宗立つに及んで、(千七百九十五年)太宗の從弟撻懶國政を執り、始めて其請に應じ、慇懃を敵國に示して、自己の勢力を增進せんと欲し、宋人秦檜なる者、囚はれて金軍に在るを放ち還して、兩國の和議を講せしむ。

秦檜和議を唱ふ

金軍の北に還りてより、宋軍連に邊境を恢復せしが、秦檜宋に來歸し、高宗に登庸せられて、相となるに及んで、嚴に其進軍を禁じ、使を金に遣りて和を請はしむ。時に金の熙宗は、撻懶の宋と通じて國を危くするの異志あるを疑ひ、之を誅戮して復南伐の軍を起す。宋將韓世忠、岳飛等逆擊して之を破り、將に河北を恢復するの勢ありしが、秦檜尙ほ和議を持し、使を金にやりて兵を罷めんことを乞ふ。金も亦前敗に懲りて之に應じ、遂に左の條件を締結せり。(千百一年)

(第一)東は淮水、西は大散關(陝西省鳳翔府寶雞縣)を以て、兩國の境界となす。

(第二)宋より歲貢銀絹各廿五万を納むべし。

(第三)宋の君主は金の封冊を受くべし。

(第四)徽宗の梓宮及韋太后を宋に送歸すべし。

兩國の媾和已に成りしも、宋の學者、軍人等多く之を悅はず。宋の學者は、一方にては漢、唐の學者の古典の註疏のみに齷齪たりし反動として、一方にては南、北朝以來流行せ

秦檜學者を抑へて文字の獄を起す

し佛教の影響として、文字の訓詁をすてゝ經傳の義理を攻究するを尚べり。仁宗の時、周敦頤（濂溪先生）胡瑗（安定先生）ありて其氣運を啓き、尋て神宗の時、程顥（明道先生）程頤（伊川先生）の輩出で、所謂宋學の一派を開き、學藝よりも較ろ實行を重んずるの傾向を作りければ、彼等は皆君父の仇なる金と和すべからざるを主張せり。秦檜是に於て文字の獄を起こし、一言一句嫌忌に渉る者は、必す之を貶竄して學者の口を塞ぎ。又岳飛、韓世忠等の兵權を奪うて、專ら反對黨を抑制せしかば、是より敢て戰を言ふ者なし。

金の熙宗晩年暴虐なりしかば、從弟廸古乃之を弑して位を簒ひ、舊都會寧府（按出虎水源に在り）の僻幽なるを厭ひ、都を燕京に移して之を中都となし、大に宮殿を修めて華麗を盡し、（千八百十三年）尋で六十万の大軍を起して南に下り、江南を併呑せんと志しゝが、（千八百廿一年）國人離叛し、其從弟烏祿を擁して帝位に即かしむ。之を世宗となす。世宗南伐の兵をやめ、宋に和議を求む。是時孝宗、高宗の禪を受けて宋に君たり。金の内亂を機とし、鋭意恢復を謀りしも、其成功の難きを知りて、遂に金の請に應じ、從來の君臣の關係をやめ、新に叔姪の關係となし、且從來の歳貢、銀帛各廿五万を、歳幣各廿万に減ずるを約して和を結べり。（千八百廿五年）

廸古乃の遷都及南侵

金宋の媾和

遷都以來、金の國風漸く奢侈、文弱に流る。世宗之を憂ひ、國人の漢姓を冒し、又漢服を著くるを禁じ、且一般の經史を

金の世宗國風を保守す

女眞文字に譯出し、力めて其國風を保守せしむ。實に金の中興の英主なりしが、世宗死し、(千八百四十九年)孫章宗嗣ぐに及んで、嬖臣事を用ひ、國勢漸く傾けり。

是時宋の孝宗も亦位を子光宗に傳へしが、光宗父皇に禮なかりしかば、群臣、國人服せず。韓侂胄遂に光宗を廢して、子寧宗を擁立せしが、是より其功を負うて國政を擅にし、

韓侂胄と朱熹と

朱熹(晦菴先生)の已に迕ふを含みて之を貶黜せり。(千八百五十四年)朱熹は當時の大儒にして、程顥、程頤の學を祖述し、盛に致知、養性の說を唱へ、其門弟天下に遍かりしかば、其貶黜せらるゝに及んで、天下囂然として朝政を非とす。韓侂胄怒り、朱熹の門流を僞學徒となし、其官途の就職と、其著書の公布とを嚴禁せり。(千八百五十六年)然れども朱熹の學說は天下に歡迎せられ、爾來今日に至るまで、儒學の正流となれり。

韓侂胄金を侵す

韓侂胄已に宋の內政を擅にし、又外征を起して威嚴を建てんと欲し、金の國勢振はざるを機として、北伐の軍を起しゝが、(千八百十六年)反つて大敗せしかば、寧宗遂に韓侂胄を斬りて金に謝し、且歲幣銀帛各十万を增し、別に犒師銀三百万兩を贈りて和議を結べり。(千八百十八年)然れども是時蒙古の勢已に强く、幾ならずして金、宋相繼ぎて其併呑する所となれり。

宋和を金に請ふ

第七章　蒙古の興起

蒙古部長鐵木眞

蒙古部は唐代より斡難、怯魯連二河の水源なる不而罕山（今の肯特山の支脈必兒喀嶺）附近の地に蕃息し、世々遼、金に羈屬せしが、鐵木眞其部長となるに及んで、（千八百五十四年頃）頻に近傍の諸部を併せ、勢漸く強大となる。

蒙古の興起時代に於ける塞外の形勢

當時蒙古部の東隣には、興安嶺に接して塔々兒部あり。其北貝加爾湖畔に沿うて泰赤烏部あり。其南は砂漠を阻て、長城に接して汪古部あり。其西薛靈格河の流域には蔑里吉部あり。蔑里吉部の南には克烈部あり。更に其西按臺（今の阿泰爾）山附近には乃滿部あり。乃滿部の南、天山の附近には畏吾兒（故の回紇）部あり。又貝加爾湖の西岸には斡亦剌部あり。其西也里的石河の流域に吉利吉思（故の黠戛斯）部散居せり。

乃滿部の太陽罕

鐵木眞先づ蔑里吉部を破り、泰赤烏部を降だし、尋で克烈部を滅ぼし、汪古部を招致し、蒙古の勢日に強大を加へしかば、乃滿の部長太陽罕は、斡亦剌、塔々兒の諸部と連合して鐵木眞を襲ひしも、鐵木眞之を杭海（今の杭愛）山に逆擊して太陽罕を斃せり。（千八百六十四年）太陽罕の子屈出律は、餘衆を也里的石河上に會して恢復を圖りしも、後敗れて西遼に奔れり。是に於て塔々兒部以下、前後蒙古部に降り、內、外蒙古の地全く鐵木眞に歸しければ、遂に大汗の位に即き、成吉思汗（強盛なる君主の義）と號せり。（千八百六十六年）時に年正に五十二才なり。

鐵木眞內外蒙古の諸部を一統して成吉思汗と稱す

成吉思汗已に塞外を一統しければ、兵を南して先づ西夏

成吉思汗西夏を降し金を侵す

を降たし、(千八百六十九年)尋で金を侵す、時に金の章宗已に死して内亂あり。成吉思汗之に乘じて直に中都、燕京に逼る。章宗の庶兄宣宗位に即き、和を蒙古に請ひ、都を南汴京に遷せり。(千八百七十四年)是に於て黄河以北の地は概ね蒙古に歸し、金は唯北は黄河により、西は潼關によりて其侵畧を防禦するのみ。

蒙古軍西遼に向ふ

曩に西遼に遁れし乃滿の屈出律は、遂に西遼の王位を簒ひ、蒙古の南伐を機として其虚を擣かんことを圖る。成吉思汗之を聞き、部將哲別をやり、之を擊破せしむ。これ實に蒙古西征の導火にして、葱嶺以西は爲に空前絶後の一大變動を見るに至れり。

大食の哈利發實權を失ふ

第八章　蒙古の西征

曩に摩訶末(マホメット)によりて建設せられたる大食(タジク)國の領土は、葱嶺以西の亞細亞全土より、亞非利加及歐洲の一部に跨り、文運も亦旺盛を極め、國都八吉打(バグダド)は一時世界の文化、通商の中心となりしが、皇紀千四百年代の末より、哈利發(カリフ)の威嚴次第に衰へ、所在の豪族は算端(サルタン)(君王の義)と稱し、哈利發の代理者として、其地方に於ける兵馬、政治の大權を握り、隱然獨立の姿をなし、哈利發は唯宗教上の虚位を充すに至れり。

西突厥が一時中央亞細亞を領せし故、突厥(トルコ)人種の大食國内に住する者多く、哈利發及算端等は、其武勇を愛して之

突厥人種大食國内に跋扈す

哥疾寧家の興亡

「セルヂュク」家の盛衰

を軍隊に用ゐしより、次第に權勢を得しが、皇紀千六百五十年の頃、マームードなる者、突厥人種より起りて哥疾寧領土を開き、更に印度に侵入し、(千六百六十一年)ラヂャプト種族の連合軍を擊破して、印度河及恒河の流域を占領せしが、マームード死して(千六百九十年)哥疾寧家の勢威衰へ、遂にセルヂュク家の擊破する所となれり。(千六百九十七年)

セルヂュク家の始祖をセルヂュクといふ。亦突厥人種に屬し、不花剌附近に居りしが、孫トグルルに至り、哥疾寧家を破りて其領土を奪ひ、トグルルの子アルプ、アルスラン、孫メリク、シャー等、頻に東羅馬帝國を破りて地を西に擴

耶律大石「セルヂュク」家を破りて西遼國を立つ

乃滿の屈出律西遼を滅ぼす

め、國運隆盛を極めしが、メリク、シャーの死に莅みて、(千七百五十二年)其領土を諸子及功臣に分割せしより、セルヂュク家の勢威漸く傾けり。時正に遼の王族耶律大石は、天山南路の畏吾兒部を征服して中央亞細亞に入り、セルヂュク家を破りて阿母河以北の地を奪ひ、遂に國を西遼一に哈喇契丹(黒契丹の義)と號し、都を吹河上の虎思斡耳朶に奠め、(千七百八十六年)花剌子撲國、吉利吉思部等を羈縻して、一時中央亞細亞に雄視せしか、其孫直魯克の時、乃滿の屈出律蒙古に逐はれて來奔し、幾ならずして花剌子撲王と通じ、直魯克を襲うて西遼を簒へり。(千八百七十一年)

曩にメリク、シャーの領土を分つや、部將ヌシュ、テギンは

花刺子摸の興起

花刺子摸王となりしが、其玄孫テキシュはセルヂユク家の耶律大石に敗られしに乘じ、之れを滅して波斯を一統し、哈利發を擁して西方亞細亞に號令せり。テキシュの子默哷嗣ぎ、(千八百六十年)屈出律に應じ、西遼を滅ぼして、西爾河以南の地を畧し、自餘の西遼の領土は、悉く屈出律に附與せしが、哲別の軍至るに及んで屈出律は敗死し、(千八百七十八年)其地悉く蒙古に歸し、蒙古は直に花刺子摸と境を接するに至れり。

屈出律の敗死

花刺子摸王默哷「ゴール」家を滅ぼす

哥疾寧家の衰微するや、阿富汗人シャハブ、ウッチンなる者ゴール(「ヘラット」の東南)に據り、(千八百十二年)哥疾寧家に代りて、阿富汗斯坦及北、西、中三印度を領せしが、シャハブ、ウッヂン死し、ゴール家の振はざるに乘じ、默哷は全く阿富汗斯坦を併呑せり。(千八百十五年)ゴール家の滅亡と共に、シャハブ、ウッヂンの部將クタブ、ウッヂンは、中印度のデルヒに據り、賓都耶山北の全土を占領せり。彼はもとゴール家の奴隷なりしが故に、之を奴隷王家といふ。

印度の奴隷王家

花刺子摸王默哷既に西遼を滅ぼし、又ゴール家を斃して、より、意滿ち氣驕り、屢蒙古の商民、使人を殺戮せしかば、成吉思汗大に怒り、自から大軍に將とし、四子朮赤、察合台、窩濶台、拖雷と共に、花刺子摸に侵入し、(千八百十八年)國都尋思干(今の撒馬兒罕)を陷る。默哷は僅に身を以て免れしも、蒙古の將、速不台、哲別に追迫せられて、遂に裏海島中に竄死せり。(千八百八

默哷の竄死

札蘭丁印度に遁る

蒙古軍大に阿羅思の諸侯を破ぶる

十年）默啓の子札蘭丁は、哥疾寧に據りて恢復を圖りしが、亦大敗し、印度に遁れて奴隷王家に依る。是に於て花剌子模の地悉く平定しければ、成吉思汗遂に東に還れり。（千八百八十四年）

速不台、哲別の二將は、曩に默啓を追うて裏海に至り、更に太和嶺（高加索山）を踰えて、突厥人種の一派なる、欽察部に侵入す。欽察部は阿羅思（露西亞）の諸侯と連合し、之を阿里吉河畔に逆へて大敗せり。（千八百十四年）會、成吉思汗東歸の報あり しかば、蒙古軍は大に阿羅思の東南部を掠奪して去れり。

第九章　金の滅亡

蒙古西夏を滅ぼす

成吉思汗東に歸るや、西夏の曩に蒙古に降りしも、其反覆常なきを責めて之を滅ぼせり。（千八百十七年）李元昊より凡そ百九十年にして、西夏亡ぶ。成吉思汗は更に金を侵さんとせしが、六盤山（甘肅省鞏昌府）に至りて死せり。（千八百十七年）之を太祖となす。

クリルタイ」の組織

蒙古の法、大汗となる者は必ず諸王、諸將及蒙古附屬の諸國の君主等を以て組織せる、クリルタイと稱する大會の推戴を經るを要せしが、是に於て太祖の第三子窩濶台推されて蒙古の大汗となる。即ち太宗なり。太宗始めて都を哈喇和林（外蒙古杭愛山の麓）に奠め、（千八百十九年）又父の遺志を紹ぎ、弟拖雷と共に汴京を陷る。時に金の宣宗の子、哀宗位に在り

窩濶台の即位

蒙古宋と通じて金を滅ぼす

しが、蔡州（河南省汝寧府）に奔りて宋の援を乞ふ。宋は金の蒙古に敗れし以來、既に歳幣を絶ちしが、是に至り反つて蒙古に通し、軍を合せて蔡州を陷る。（千八百九十四年）金は帝を稱すること百廿年にして亡べり。宋は此機に乘じて中原を恢復せんと欲し、急に兵を發して汴京、洛陽に入り、蒙古の守兵を逐ひしかば、兩國の和親破ぶれ、蒙古の軍直に南下して、宋の邊境日に蹙れり。

蒙古と宋と交戰の原因

蒙古と高麗との關係

蒙古の軍直に阿羅思に入り、北に向うて烈野贄を屠り、モスカウを陷れ、更に南に下りて幾富を取り、遂に歐洲の内地に逼り、一軍は馬札兒（今の匈牙利）を、一軍は孛烈兒（今の波蘭土）を蹂躙して、將に捏迷思（今の獨逸）を攻掠せんとせしかば、歐洲北部の諸侯王等連合して、之をリーグニッツに逆擊せしも、反つて大敗せり。（千九百一年）會太宗の訃音到りしを以て蒙古軍東に還れり。

拔都の西征

「リーグニッツ」の戰

國都開城（即ち松嶽）を陷れ、高麗は遂に降を乞へり。（千九百一年）金亡び、高麗敗れ、東方稍事なきに及んで、太宗は更に西方を經畧せんと欲し、朮赤の子拔都に命じ、其兄斡耳朶、太宗の子貴由、拖雷の子蒙哥等と共に阿羅思を征伐せしむ。（千八百九十六年）蒙古の軍直に阿羅思に入り、北に向うて烈野贄を屠り、モスカウを陷れ、更に南に下りて幾富を取り、遂に歐洲の内地に逼り、一軍は馬札兒（今の匈牙利）を、一軍は孛烈兒（今の波蘭土）を蹂躙して、將に捏迷思（今の獨逸）を攻掠せんとせしかば、歐洲北部の諸侯王等連合して、之をリーグニッツに逆擊せしも、反つて大敗せり。（千九百一年）會太宗の訃音到りしを以て蒙古軍東に還れり。

蒙古大汗國分裂の遠因

太宗死し、子貴由歐洲より歸り、クリルタイに推されて大汗となる。(千九百五年)之を定宗となす。在位三年にして死し、太宗の一族は、太宗の孫失烈門を擁立せんと謀りしが、拖雷の子蒙哥反つてクリルタイに推されて、大汗の位に即き、憲宗となりしかば、太宗の子孫皆平ならず。此の如くして太宗の子孫と拖雷の子孫とは、永く怨敵となり、遂に蒙古大汗國分裂の遠因を釀せり。

忽必烈の南方經畧

第十章　宋の滅亡

憲宗位に即き、皇弟忽必烈をして南方を經畧せしむ。忽必烈四川より雲南に入りて大理國を降し、(千九百十三年)更に吐蕃に入る。吐蕃の始祖棄宗弄贊以來、歴代佛法を崇奉せしが、北印度の一僧巴特瑪撒巴々なる者吐蕃に來り、其國俗に適應せる一種の密教喇嘛教(喇嘛とは無上の義にして高僧を云ふ)を唱ふるに及んで、(千四百七年)其教盛に傳播し、從うて喇嘛の勢威遂に國王を凌ぐに至れり。忽必烈の吐蕃に入るや、先づ喇嘛を招致し、後喇嘛拔思巴を帝師に拜して、吐蕃全土を統領せしめたり。忽必烈更に部將兀良合台をやり、交趾を征せしむ。時に大越國の李氏既に亡び、陳煚なる者代りて交趾に王たりしが、是に至りて蒙古に降れり。(千九百十八年)

喇嘛教の由來

交趾蒙古に降る

太祖の東歸以來、花剌子摸の殘黨、及中央亞細亞の回教徒等往々叛亂を企て、西方漸く不穩なりしかば、憲宗は皇弟旭烈兀をやり、之を平定せしむ。(千九百十四年)旭烈兀先づ木剌夷

旭烈兀の西征

八吉打の哈利發の滅亡

部を伐つ。木剌夷部は當時裏海の南岸に蟠踞せし、暗殺派と稱する回教徒にして、兇悍獰猛久しく蒙古の累をなせしが、旭烈兀之を滅ぼし、更に八吉打に逼りて哈利發モスタシムを降す。(千九百十八年)れて、哈利發を稱せしかば、旭烈兀は部將をして印度の奴隷王家を侵畧せしめ、自から大軍を率ゐて西に進み、將に密昔兒の回教徒を殲さんと志しゝが、會、憲宗の訃音到りて、西征の軍を收む。

憲宗忽必烈と宋を侵す

大理、吐蕃、交趾已に蒙古に降りしかば、憲宗は皇弟阿里不哥をして喀喇和林を留守せしめ、自から大軍に將とし、忽必烈と力を併せて宋を侵しゝが、中途にして死せり(千九百十八年)時に理宗寧宗に繼ぎて宋に君たり。賈似道をやり蒙古を防がしむ。賈似道鄂州(湖北省武昌府)に至り、密使を忽必烈に遣り、臣と稱し幣を納めて和せんことを請ふ。忽必烈方に阿里不哥が喀喇和林に據りて、蒙古の大汗を稱せんとすると聞き、遂に江北の地と、歳幣銀絹各二十万を納むるを命じて和を賈似道に許し、匆々軍を北に還し、開平(内蒙古多倫諾爾の北)に至り、部下の諸將の勸進により、正當なるクリルタイを待たずして蒙古の大汗となる。之を世祖といふ。(二千九百十年)尋で自から將として阿里不哥を降し、新に都を燕京に奠めて之を大都となし、又國號を建てゝ元といふ。(千九百一十一年)然れども從來憲宗の一族に怨ある定宗の一族は、世祖の即

宋の賈似道忽必烈と和す

忽必烈と阿里不哥と

蒙古國號を建てゝ元といふ

蒙古の南侵と宋の滅亡と

位が、蒙古の慣習に違背せるを口實として臣禮を執らず。此の如くして蒙古分裂の基漸く成立せり。

曩に賈似道の蒙古と和して還るや、深く臣と稱し幣を納むることを匿くし、世祖の使者來りて前約を促す者を囚へしかば、世祖大に怒り、伯顏をして大擧南伐せしむ。時に理宗の從孫恭宗位に在り。賈似道を黜け、文天祥等の勤王の兵を徵して防戰せしが、國都杭州遂に陷り、(千九百卅五年)宋は建國より三百十六年にして斯に滅亡す。宋の遺族等崖山(廣東州府省廣の南)に據りて、恢復を圖りしも、幾ならずして元軍の破ぶる所となれり。

第十一章　元初の外征

世祖東南方諸國を經畧す

高麗と元との關係

元我國に入寇して大敗す

從來蒙古の外國經畧は、主として西北の方面に限りしが故に、世祖は專ら兵を東南に用ゐ、宋を滅ぼして後は更に我國、高麗、交趾、占城、緬及南洋侵畧の軍を起せり。

(第一)我國及高麗との關係　太祖の時一旦高麗を降服せしも、其後反覆常なかりしが、世祖の時高麗の內亂を鎭定し、太祖十世の孫なる元宗を擁立し(千九百廿九年)尋で元宗の子忠烈王に其皇女を妻はせしより、高麗は全く蒙古の外藩となれり。

世祖已に高麗を服してより、其王を介して屢、我國を招致せしも、我國は唐末以來久しく支那と國際上の交通を絕ちしと、且蒙古の書辭の無禮なりしとを以て之を退け、其

使者を斬りしかば、世祖怒り我壹岐對馬に入寇して成功せず。(千九百四年)更に阿剌罕、范文虎を將とし、高麗の兵を併せ、戰艦四千五百艘、我九州を侵しゝが、颶風の爲に復大敗して還れり。(千九百四十一年)世祖報讐を志しゝも、南方の經畧に暇なくして、其事遂にやみたり。

元の世祖緬國を降だす

(第二)緬國との關係　緬は今の緬甸なり。蒙古曩に大理國を降して雲南の地を定むるや、其西南境は直に緬國に接せしかば、世祖屢使をやり、其朝貢を促しゝも命に應ぜず。蒙古の軍來りて、國都蒲甘を陷るに及んで、緬王遂に歲貢を約して降を乞へり。(千九百四十三年)

(第三)交趾及占城との關係　世祖の曩に交趾を降すや、又其南隣國なる占城を招致せしも、命に應ぜざりしかば、皇子脫歡をして途を交趾に借り、占城を伐たしむ。(千九百四十四年)時に陳煚の孫陳昑交趾に王たりしが、元の要求を拒む。脫歡先づ交趾を征し、一旦國都交都(今の河內)を陷れしも、軍中疫作りて成功せず。已にして陳昑其罪を謝して元に入貢し、(千九百六十二年)占城、眞臘も亦尋で來降せり。

元の脫歡交趾を征す

(第四)南洋諸國との關係　世祖は占城、交趾を征討すると同時に、又使者を發して、南洋諸國を招致せしむ。是に於て馬八兒(南印度の東岸)蘇木都剌、以下の諸國皆元に入貢せしが、獨り爪哇命を聽ざりしかば、元軍來りて之を擊破せり。(千九百五十三年)是より元の國威南洋に遍ねし。

元の國威南洋に遍ねし

元初に於ける蒙古の版圖

蒙古の四汗國

第十二章　元の極盛

鐵木眞が蒙古の大汗となりしより、僅々八十年の間に於て、蒙古は實に空前絶後の一大帝國を建設せり。世祖時代に於ける蒙古の領土は、西伯利亞の北部と印度の南部とを除き、亞細亞大陸を横貫して歐洲に跨り、而して蒙古の諸王は、此大帝國内に皆幾分の私領を有せしが、就中左の四部尤も大なり。

(第一)伊兒汗國　旭烈兀の子孫の封地にして、西方亞細亞一帶を領し、マラグア(「ウルミア」湖の東)を國都とす。

(第二)欽察汗國　伊兒汗國の北に位し、東は吉利吉思荒原より、西は歐洲の匈牙利の國境に至る。拔都の子孫斯に君臨し、或は之を金黨汗國といふ。亦的勒(今の「ヲルガ」)河下流の薩萊を國都とす。

(第三)察合台汗國　察合台の子孫斯に君臨し、西遼の故土を領し、阿力麻里(伊犂曲城附近)を國都とす。

(第四)窩濶台汗國　窩濶台の子孫の封地にして、乃滿の故土に當り、也迷里(「エミル」河附近)を國都とす。

世祖は元の皇帝として、遼東、内外蒙古、支那本部、圖伯特及中央亞細亞を直領するのみならず、又蒙古の大汗として、此等の四汗國を統御せざるべからず。故に彼は此大帝國を管理せんが爲に、阿母河行省を建てゝ葱嶺以西を統べ、

世祖の屬地管轄法

阿力麻里元帥府を建てゝ天山北路を統べ、別失八里（今の廸化府）元帥府をおきて天山南路を統べ、嶺北行省をおきて杭海山以北を統べ、遼陽行省を建てゝ滿州及朝鮮を統べ、安南行省を建てゝ南海諸國を統べしむ。

蒙古時代に於ける東西の交通頻繁となりし二大原因

空前絶後の一大帝國現出して、所在に割據せし幾多の小國滅亡せしが故に、商賈の往來自由となりしと、且又此大帝國内には、政治上及軍事上の目的を以て、新に官道を開き、宿驛を設け、守備隊を配置せしが故に、大に旅客の危險、困難を減少せしと、此二大原因よりして、東西兩洋の交通は其面目を一新し、西方亞細亞及歐洲の商人は、遠く其販路を喀喇和林、燕京に開き、而して波斯、印度と支那との海

海陸兩路の交通

上の交通も亦頓に頻繁を加へ、江南なる泉州、福州の諸港は、當時世界第一の貿易場となり、外國人の其地に來住する者幾万を以て數ふべし。かの以太利のマルコ・ポーロ、及亞非利加のイブン・バッータ等が、支那に遠遊を試みしは、實に元時代にして、我日本の國名の西方に知られしも亦此時代に屬す。加之蒙古の大汗殊に元の世祖は、人種の異同を問はず、才能ある者を登庸せしが故に、阿剌比亞、波斯の學者、軍人、以太利、佛蘭西の畫家、職工等の來りて、其朝に仕ふる者頗る多く、此の如くして西方の天文、數學、砲術等は支那に輸入せられ、支那の羅針盤、活版術等は西方に將來せられたり。

西方の文化と東方の文化と

蒙古と耶蘇教國との關係

世祖の時初めて耶蘇教の會堂を建つ

東西の交通頻繁を加ふるに從ひ、耶蘇教徒の東方に布教する者亦漸く多し。彼等は方に十字軍の再興に熱中せしが故に、蒙古と同盟して回教徒を撲滅せんと欲し、已に羅馬法王インノセント四世は、使僧柏朗嘉賓を定宗の王庭に遣り、(千九百五年)尋て佛蘭王ルイ九世も亦使僧羅柏魯をして、憲宗を喀喇和林に訪はしめたり。(千九百十三年)

蒙古は建國以來の方針として、一般に宗教の自由を許せしが、殊に回教國を併呑せんには、歐洲の耶蘇教徒と親和するの必要を知りしが故に、一般に之を厚遇し、世祖の時剏めて其教會を燕京に建設するを許せり。(千九百十四年五)爾來幾多の耶蘇教徒支那に來りしが、元亡びて東西の交通や

海都汗の反亂

八剌と海都との同盟

むと共に耶蘇教も亦次第に廢絶に歸せり。

第十三章　元の衰微

初め憲宗蒙古の大汗となりしより、太宗の子孫たる窩濶台汗國の諸王は、常に不平を抱きしが、世祖の位に即くや、彼等は皆之を否認し、就中太宗の孫海都は、世祖が宋との攻爭に暇なきを機とし、窩濶台汗國の諸王を誘うて反旗を飜せり。(千九百廿五年)

世祖は察合台の曾孫八剌を察合台汗に命じて、海都を抑へしむ。八剌反つて海都に與し、相與に大汗の直領地たる中央亞細亞を畧し、更に世祖の親弟、旭烈兀の封地たる伊

欽察汗と伊兒汗との關係

兒汗國を侵しゝが、(千九百廿九年)旭烈兀の子阿八哈の爲に敗られて軍を還せり。

欽察汗の始祖拔都の後、二傳して其弟別兒哥に至る。熱心なる回教徒にして、伊兒汗旭烈兀が八吉打を陷れ、哈利發を擒にせしを怨み、埃及の回教徒と呼應して、屢伊兒汗國に侵入し、爾後此兩汗國長く怨敵となりしかば、拔都の孫忙哥帖木兒、別兒哥に繼ぐに及んで、亦海都に與し、海都は欽察、窩濶台、察合台三汗國の諸王の推戴によりて、新に蒙古の大汗となり、(千九百廿九年)遂に八剌の子都哇と兵を併せて、頻年喀喇和林に逼る。太祖の諸弟搠只、鐵木哥等の子孫の、滿州地方に王たる者も亦之に應ぜり。(千九百四十七年)世祖は伯

海都汗蒙古の大汗となる

滿州の諸王海都に應ず

都哇と察八兒と

顏をして海都を擊退せしめ、自から將として滿州地方を平定せり。

世祖死し(千九百五十四年)孫成宗嗣ぐに及んで、海都尙ほ屢邊に入寇せしが、幾ならずして死し、(千九百六十一年)子察八兒窩濶台汗となり、察合台汗都哇と共に元に降れり。(千九百六十三年)已にして察八兒復異志を抱きしかば、都哇は元の援兵を乞うて之を擊破し、(千九百六十六年)遂に窩濶台汗國を滅ぼして其地を併呑せしより、西北邊始めて事なきを得たり。

窩濶台汗國の滅亡

海都亂を起してより斯に四十餘年、元は連年の戰爭に疲弊せしかば、世祖の時既に阿合馬特(波斯人)盧世榮等を登庸して國庫の充實を圖らしむ。彼等は交鈔即ち紙幣を濫發

世祖國庫を充實するを圖る

蒙古の相續法

し、或は外國貿易を官業となし、或は鹽鐵、酤酒の稅を增して一時の急を救ひしも、徒に元室滅亡の遠因を釀ましに過ぎず。加之蒙古の相續法は、必しも父子の世襲を認めざるが故に、帝位繼承の際に多少の紛爭を起し、從うて權臣其擁立の功を負うて威福を專にし、此の如くにして元は次第に衰微せり。

成宗死し、(千九百六十七年)從子武宗嗣く。武宗位を弟仁宗に傳ふ。仁宗は武宗の子、和世㺯を立てゝ皇嗣となさんとせしが、鐵木迭兒讒して之を黜け、位を實子碩德八剌に傳へしむ。之を英宗となす。和世㺯は察合台汗國に遁がれ、其援兵を得て頻年元に入寇せり。

鐵木迭兒と燕帖木兒と

鐵木迭兒は其擁立の功を負ひ驕暴なりしかば、英宗漸く之を疎外せしに、鐵木迭兒の黨與は帝を弑し、其從子泰定帝を立つ。(千九百八十三年)泰定帝の後、子天順帝嗣ぎしが、燕帖木兒之を廢し、和世㺯の弟文宗を擁立して其信任を得、文宗の子順宗の時、其女を納れて皇后となし、天下の大權を擅にせり。

交鈔の濫發と物價の騰貴と

第十四章　明の興隆

元は國初より交鈔を濫發せしかば、順帝の時に至りては、其價下落して全く通用をなさず。從うて物價は騰貴して人民の困苦甚しく、加之曩に吐蕃を征服してより、之を撫

元代に於ける喇嘛の尊崇

御せんが爲に喇嘛を尊崇し、世祖初めて喇嘛拔思巴を帝師に拜せし以來、歷代の帝王、皇妃皆帝師に就きて佛戒を受け、佛事供養の費貲られず。順帝の時に至りて其極に達し、國庫益缺乏して、國民の負担日に重く、方に物價の騰貴に苦める國民は、此厚歛に堪えずして皆亂を懷ふ。殊に順帝即位以來、淫樂を事として國政を顧みず。元室の威嚴全く地に墜ちしかば、蒙古の羈絆を快とせざる漢人等、遂に四方に紛起せり。

群雄の蜂起

張士誠は江蘇に據り、陳友諒は湖北、湖南、江西を畧し。方國珍は浙江の地を占む。朱元璋も兵を濠州（安徽省鳳陽府）に擧げて、遂に金陵（江蘇省江寧府）に據りしが、（二千十五年）兵勢日に强く、陳友諒、張士誠、方國珍等を討滅して、江の南北一帶の地を併せ、尋で部將徐達、常遇春をして元を伐たしむ。徐達等到る所元軍を摧破して、直に大都に逼りしかば、順帝は防戰に暇なく、遂に開平に奔れり。世祖國號を建てゝより九十八年にして元亡び、（二千廿八年）朱元璋帝位に即く。之を明の太祖（洪武帝）となす。

朱元璋の成功

元の滅亡

蒙古帝王諸汗畧系（本文に關係なき者は一切省略す）

- 赤—
  - 昔班……月祖伯汗……
    - 悉畢兒汗
    - 布哈拉汗
    - 基華汗
  - 脫哈帖木兒……哥里米汗……
    - 哥里米汗
    - 喀山汗
- 斡兒朶……白黨汗……
  - 大斡兒朶汗
  - 阿斯都拉汗
- 扳都……金黨汗

明軍脫古思帖木兒を破りて漠南を平定す

- ㊀太祖
  - 察合台……察合台汗……（喀什噶爾汗 浩罕汗）
  - ㊁太宗
    - ㊂定宗……窩濶台汗
    - ㊃憲宗
    - ㊄世祖……蒙古大汗……韃靼可汗……（察哈爾部 土默部 鄂爾多斯部）（漠南蒙古部）
    - 拖雷
      - 旭烈兀……伊兒汗……（車臣汗 土謝圖汗 札薩克圖汗 三音諾顏部）（漠北蒙古部）
      - 阿里不哥
  - 擲只……科爾沁部
  - 鐵木哥

明の太祖更に常遇春をやり、順帝を開平に擊つ。順帝は應昌（開平の東）に遁れて遂に其地に死し、子脫古思帖木兒餘衆を率ゐて、大汗を喀喇和林に稱し、遼東を侵畧せんとなしゝが、明將藍玉大軍に將として之を捕魚兒湖畔に襲ひしかば、脫古思帖木兒大敗して喀喇和林に退き、途土拉河畔に

太祖又西南蠻を征服す

至りて、反者の手に死せり。（二千四十八年）是に於て蒙古の部族全く潰散し、漠南、滿州の地は皆明の版圖に歸せり。太祖は同時に又兵を四川、貴州、雲南の方面に用ひ、元の遺族若くば群雄の其地に割據する者を平定し、更に大理、金齒（大理の西方に住せし部族。金を以て齒を飾るが故に此名あり）等雲南の西部の諸蠻部を招降せり。（二千四十一年）

太祖の內外に對する政策

太祖已に南北を平定せしより、外は遼東（盛京省遼陽州）大寧（內蒙古喀喇沁部）大同（山西省大同府）開平、甘州（甘肅省甘州府）貴州（貴州省貴陽府）洮州（甘肅省鞏昌府）等邊要の地に、行都指揮使司をおきて國防を嚴にし、內は元末の諸弊を革め、租稅を輕くし、又宋の郡縣制度を用ゐて、帝室孤立せしに懲り、諸皇子を要地に分封して、帝室の

燕王の反

燕王の簒立

藩屏となしゝが、其邊陲の諸王には特に征伐の自由を附與せしを以て、漸く尾大の勢をきたし、太祖の死後幾ならずして、内亂を釀すに至れり。

太祖死し、(二千五十八年)孫惠帝(建文帝)嗣ぎ、諸王の强大を恐れ、漸くこれを抑壓せしかば、諸王皆安せず。燕王棣は惠帝の叔父なり。燕京に據り、北邊を鎭して、夙に重望ありしが、惠帝の諸王と相善からざるを機として反旗を擧げ、大軍を率ゐて南下す。

曩に太祖は惠帝の年若くして、功臣を制馭し能はざるを慮り、多く宿將を誅戮せしかば、燕王南下するに及んで、朝廷の諸將よく之を防ぐ者なく、殊に金陵の宦者等燕王に

成祖交趾を平定す

内通しければ、城遂に陷り、惠帝出奔して往く所を知らず。燕王代りて帝位に即く。之を成祖(永樂帝)となす。(二千六十二年)都を燕京に移して北京となし、舊都金陵を南京となす。

成祖雄志あり。交趾に内亂あるに乘じて之を滅ぼせり。交趾王陳昑曩に元に歸服せしが、其後國威漸く振はず。明初に至りて民心殆ど陳氏に離叛せるに乘じ、黎季犛なる者王位を簒ひ、國を大虞と號し、(二千六十二年)使を明に遣りて其封冊を求む。成祖は陳氏の遺族を助け、大虞を征して黎季犛を擒にし、(二千六十六年)其地に交趾布政司を開きて之を統治せしかば、占城、老檛の諸國も亦相尋で明に内附せり。然れども明は故の陳氏の後を立てざりしかば、國人服せず。黎利

明復交趾を棄つ

なる者之に乘じて亂を作し、國を大越と號し、(二千七十八年)屢明軍を破れり。成祖の孫宣宗(宣德帝)の時遂に交趾を棄て、(二千八十九年)黎利を安南王に封じて和を結べり。

鄭和の遠征

曩に成祖の位を簒ふや、惠帝の海外に逃亡せしを疑ひ、宦者鄭和に命し、海軍を率ゐて南海諸國を歴訪せしめ、服せざる者あらば輙ち之を征せしむ。明が安南を併せ、國威の南海に加はるに從ひ、琉球、眞臘、暹羅、滿剌加、渤泥、蘇門答剌、

明威南洋に振ふ

瓜哇、榜葛剌等の卅餘國皆明に來貢し、明人も亦多く南海諸國に通商せり。

第十五章　蒙古諸汗國の盛衰

蒙古諸汗國衰微の大原因

元の東方に滅亡すると共に、察合台、伊兒、欽察の三汗國も亦西方に衰微せり。蒙古の諸汗國が爾く衰微せし大原因は、主として其王位相續法の不完全に在り。蓋し蒙古の慣習として、有力にして年長なる者を擁して、汗位を占めしむるは、游牧人種にとりて頗る適當なるへしと雖ども、已に一帝國を建設せし後は、早晩簒奪の紛擾を免れざれば

察合台汗國の衰微

なり。

都哇の後、子也先不花、察合台汗となり、父祖の怨敵たる伊兒汗國に侵入せしが、(千九百七十年)反つて伊兒汗鄂勒哲圖の爲に大敗して還り、察合台汗國の勢威是より振はず。加之其後嗣者も亦概ね暴君にして、政治上及宗教上の反亂相繼

帖木兒の崛起

ぎ、察合台汗國殆ど分崩して、中央亞細亞の地は遂に獨立の姿をなせり。是時に當りて蒙古の疎族帖木兒は柯提（阿母河の下流）より起り、悉く中央亞細亞を平定して、都を撒馬兒罕に奠めたり。（二千廿九年）

帖木兒察合台汗國を定む

帖木兒大志あり。成吉思汗の舊圖を襲うて、世界を一統せんと欲し、葱嶺を踰えて東に進み、察合台の後裔にして、當時喀什噶爾汗たりしキズルを降して、悉く察合台汗の舊土を定め、又西伊兒汗國を併せり。

伊兒汗國の形勢

伊兒汗國は阿八哈の時、東羅馬帝國と婚を通じ、且英、佛諸國と使聘を通じて其文物を輸入し、殊に其孫合贊汗に至り、内は憲法を制定して國政を改良し、外は耶蘇教徒の十字軍に加盟して、埃及の回教徒を伐ち、シリアの地を恢復して、國運頗る隆盛なりしが、弟鄂勒哲圖を經て、從子阿不賽因に至る。年尚ほ幼なりければ、國人漸く汗の命令を奉ぜず。加之欽察汗は屢北邊を侵畧して、國威も亦揚がらず。

帖木兒伊兒汗國を併す

阿不賽因死し、（千九百九十五年）嗣子絶ゆるに及んで、伊兒汗國分崩し、群雄割據の姿をなす。帖木兒之を機とし、遂に伊兒汗の舊土を平定し、更に欽察汗國に侵入せり。

欽察汗月即別

忙哥帖木兒の孫、月即別欽察汗となるや、（千九百七十三年）埃及の哈利發と婚を通し、同盟して屢伊兒汗阿不賽國を伐ちて地を開き、又東羅馬帝國及歐洲諸國と交通して其文化を輸入せり。當時以太利人は多く欽察汗國に來りて盛に商

モスカウ公宜萬一世

業を營み、阿速海濱は一時東西兩洋貿易の要所となれり。』是より先き阿羅思は、幾多の小諸侯割據せしが、月即別汗の時、モスカウ公宜萬一世は其信任を得、命ぜられて阿羅思の太公となり（千九百八十八年）汗に代りて全國の租稅徵集者となり、爾後彼は欽察汗の威名を借りて、自餘の諸侯を壓服するに力め、此の如くして露西亞帝國勃興の基礎を建設せり。

金黨汗の斷絶と欽察汗國の分裂と

月即別及其子札尼別の二代は、實に欽察汗國の最盛期なりしが、札尼別の死（二千十七年）後弑逆相繼ぎ、爲に拔都の後裔なる金黨汗の血統全く斷絶せり。曩に拔都の兄斡魯朶の子孫は、白黨の汗と稱して、吉利吉思荒原の地を領し、弟昔班の子孫は、其西阿拉海の西北に散居して、月祖伯の汗と號し、昔班の弟脫哈帖木兒の子孫は、阿速海沿岸の地を占めて、哥里米の汗と稱せしが、今や金黨汗の血統絶ゆるに及んで、此等三汗國の諸王は各欽察汗たらんことを爭ひ、哥里米の汗トクタミシュは、帖木兒の後援を得て遂に欽察汗となれり。（二千三十六年）已にして義に背きて帖木兒の領土を侵畧しければ、帖木兒は伊兒汗國を平定し終るや、自から將としてトクタミシュを破ぶり、（二千五十五年）白黨の汗コイリジヤックを欽察汗に命ぜり。

欽察汗「トクタミシュ」と帖木兒との關係

印度の形勢

是時印度には奴隷王家既に滅び、トグラック王家之に代りて、一時殆ど全印度を統一するの勢ありしが、已にして回